

潤・壺丁田遺跡

福岡県糸島郡前原町大字潤字壺丁田所在の遺跡

前原町文化財調査報告書

第 41 集

1992

前原町教育委員会

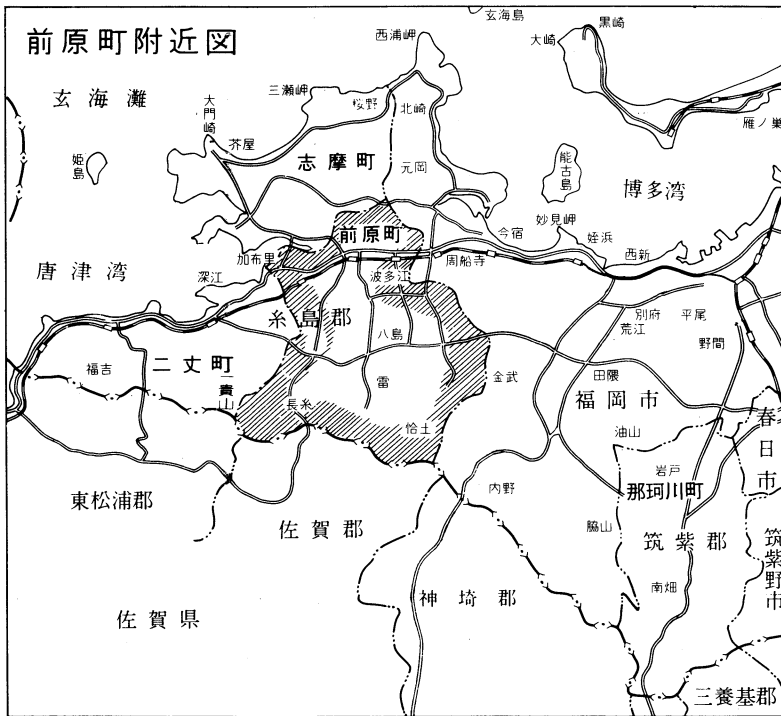


潤・壺丁田遺跡

福岡県糸島郡前原町大字潤字壺丁田所在の遺跡

前原町文化財調査報告書

第 41 集



序

昨今、新聞やテレビ等のマスメディアで、数多くの原始・古代のニュースがとりあげられておりますが、我が前原町でも多くの文化財が存在しています。

特に、埋蔵文化財包蔵地は未曾有に近く、『伊都国』の中心地として、各方面から知られ、弥生・古墳文化の花開いた土地でもあり、三雲遺跡・平原遺跡・志登支石墓群など著名な遺跡が町内に分布しています。

今回、本書で報告いたします遺跡の内容は低地に立地していた古墳時代から歴史時代まで続く複合遺跡です。この調査では数多くの成果をあげることができました。よって、この報告が古代史の解明などに役立ち、文化財の保護・保存に役立てば幸に存じております。

最後に、発掘調査に先立ち、ご協力をいただいた関係者の方に心から感謝いたします。

平成4年3月31日

前原町教育委員会
教育長 樗木 昭生

例 言

- 1、本書は平成3年度に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査は新生住宅株式会社・株式会社原田組の集合住宅建設に伴い、前原町が受託事業として実施した。
- 2、本書に記載した遺跡は潤・壺丁田遺跡で、福岡県糸島郡前原町大字潤字壺丁田に所在する。
- 3、遺構の実測・遺物の実測は、川村 博・瓜生秀文が行った。
- 4、遺構・遺物の写真撮影は川村・瓜生が行った。
- 5、本書の執筆は次のとおりである。

I-1	川村・瓜生
2	同 上
II-1	川村
2	川村・瓜生
III-1	瓜生
2	検出遺構 瓜生
	出土遺物 川村・瓜生
3	検出遺構 瓜生
	出土遺物 川村
IV	瓜生
- 6、本書の編集は川村の協力を得て瓜生が行った。

本文目次

	頁
I、はじめに	1
1、調査にいたる経過	2
2、調査組織	3
II、位置と環境	3
1、地理的な位置	3
2、歴史的な環境	3
III、調査の内容	7
1、調査の概要	7
2、第1区の調査	7
検出遺構	7
出土遺物	9
3、第3区の調査	14
検出遺構	14
出土遺物	16
IV、まとめ	32

図 版 目 次

- 図版 1 潤・老丁田遺跡全景
- 2 〔上〕 第 1 区調査区全景（北から）
〔下〕 同 上 （西から）
- 3 〔上〕 第 1 区西壁土層図
〔中〕 第 1 区 1b・1d 区間土層図
〔下〕 同 上
- 4 〔上〕 SD01 土器出土状況
〔中〕 同 上
〔下〕 SD02 土器出土状況
- 5 〔上〕 第 3 区調査区全景（南から）
〔下〕 同 上 （東から）
- 6 〔上〕 SD07 土器出土状況
〔中〕 同 上
〔下〕 同 上
- 7 〔右上〕 SD06土器出土状況
〔右下〕 SD07土器出土状況
〔左上〕 同 上
〔左下〕 同 上
- 8 〔右上〕 同 上
〔右下〕 同 上
〔左上〕 同 上
〔左下〕 同 上
- 9 〔右上〕 同 上
〔右下〕 同 上
〔左上〕 同 上
〔左下〕 同 上
- 10 〔右上〕 同 上
〔左上〕 同 上
〔左下〕 同 上
〔右下〕 第 3 区西側排水路内出土状況
- 11 第 1 区 SD01・SD02・SD05出土土器・出土木製品

12	第3区 SD06出土土器
13	第3区 SD07出土土器
14	同 上
15	同 上
16	同 上
17	同 上 およびその他の出土土器

挿 図 目 次

	頁
第1図 潤・耆丁田遺跡調査風景	1
第2図 潤・耆丁田遺跡の位置 (1/25,000)	4
第3図 潤・耆丁田遺跡位置図 (1/5,000)	6
第4図 潤・耆丁田遺跡遺構位置図 (1/600)	6
第5図 第1区調査区遺構配置図 (1/200)	6
第6図 第1区調査区西側壁面土層図 (1/60)	7
第7図 SD01 出土土器実測図 (1/3)	10
第8図 SD02 出土土器実測図 (1/3)	11
第9図 SD05 出土土器実測図 (4～6 : 1/3 ; 7 : 1/6)	12
第10図 第1区出土木製器実測図 (1/6)	13
第11図 第3区調査区遺構配置図 (1/200)	15
第12図 SD06出土土器実測図 (1/3)	17
第13図 同 上 (6 : 1/3 ; 7 : 1/6)	18
第14図 SD08出土土器実測図 (1/3)	19
第15図 同 上	20
第16図 同 上	21
第17図 同 上	22
第18図 同 上	23
第19図 同 上	24
第20図 同 上	25
第21図 同 上	26
第22図 同 上	27
第23図 同 上	28

第24図	同	上	29
第25図	同	上	($\frac{1}{6}$)	30
第26図	第3区西側排水路出土土器実測図	($\frac{1}{3}$)	31
第27図	第3区排水路等出土土器実測図	($\frac{1}{4}$)	31

表 目 次

				頁
第1表	潤・壹丁田遺跡調査行程表		2
第2表	第1調査区計測等一覧表		33
第3表	第3調査区計測等一覧表		34
第4表	同	上	35
第5表	同	上	36
第6表	同	上	37

I はじめに

1 調査に至る経過

潤・壱丁田遺跡は、福岡県糸島郡前原町大字潤字壱丁田に所在する埋蔵文化財包蔵地である。前原町は、九州の中心都市である福岡市に西接し、近年人口の増加が著しく、町の住民基本台帳人口では平成2年2月に50,000人を越えた。その一因としては、J R九州筑肥線の電化・国道202号線のバイパス建設などにより、交通手段の利便化が図られたためである。

その状況下において、前原町大字潤に、宅地造成及びマンション建設のための開発事前審査願が町都市計画課に提出され、開発事前審査会が開かれた。その席で、町教育委員会文化課は当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、文化財保護法第57条2第1項に基づき、埋蔵文化財発



第1図 潤・壱丁田遺跡調査風景

掘の届出の提出を依頼した。平成2年7月17日に、新生住宅株式会社と株式会社原田組から、上述した内容の届出が提出されたため、届出者と協議の上、11月7日に前原町教育委員会では届出者との立会いのもとで、試掘調査を実施した。その結果、土師器・磁器等が出土したため、届出者と協議の上、本調査を行うようになった。ただし、町教育委員会文化課は早急の本調査は、他の事業等の関係で無理であったため、次年度に実施することになった。平成3年4月12日に埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を前原町と届出者二者と締結し、5月18日より11月5日まで調査を実施し、その後出土遺物の整理作業等を行った。発掘調査期間中、例年のない長期の降水や台風等で、調査が遅延し、他事業に支障をおこすような状況であった。

最後に、発掘調査の実施等で、文化財の保護のご理解・ご協力をいただいた新生住宅株式会社・株式会社原田組や、地元行政区長・区民の皆様にご心から謝意を現わす次第であります。

2 調査組織

調査主体 前原町教育委員会

担当 文化課

総括 教育長 樗木 昭一

文化課々長 加幡怡都城

文化財係々長 吉村 耕治

庶務 文化係々長 中園 俊二

調査 文化財係主事 川村 博

瓜生 秀文

調査作業 原口マツノ 加布里タズ子 徳永美根子 藤木 綾子 米山八重子
 藤森 峯子 牧井 定代 行弘 ユキ 行弘カツ子 中原マチ子
 高岡 早苗 川上 豊子 藤木 和子 柴崎 末子 坂本 悦子
 杉本美知子 藤川賀代子 藤井千恵子 稲原美佐江 高橋マツ子
 山本 和子

整理作業 山口 敏子 川上 辰子 高橋 久枝 内布久美子 仲原知恵美

また、調査時に文化課同僚 林 覚・岡部裕俊・角 浩行各氏に多くの示唆のある教示を得た。

			5	6	7	8	9	10	11	
第1区	発掘調査	表土剥ぎ	↔							
		基本杭設定	↔							
		遺構検出		↔						
		実測						↔		
		写真撮影		↔						
		埋め戻し								↔
第3区	発掘調査	表土剥ぎ	↔							
		基本杭設定			↔					
		遺構検出				↔				
		実測						↔		
		写真撮影				↔				
		埋め戻し								↔

第1表 潤・壱丁田遺跡調査工程表

Ⅱ 位置と環境

1 地理的な位置

前原町は、東に福岡市・西に二丈町・南に佐賀県・北に志摩町に接する位置にあり、東経130°11'・北緯33°33'ほどにある。

町域の南側には、背振山系があり、東から井原山（983m）・雷山（995m）・羽金山（900m）の山々からなっている。背振山系は、その南側はなだらかな斜面をみ、前原町側の北側は割合に急斜面となっている。このことは、前原町から佐賀に通じる県道前原・富士線をとおってみればよく理解できることであり、この山系が断層によるものであることがわかる。

この背振山系から町域内と流れる河川は、東から瑞梅寺川・雷山川・長野川という一流河川があり、その流域には割合に肥沃な沖積地を形成している。沖積地の大半は水田として土地利用がなされ、上の三河川またはその支流には数多くの井堰があり、水田に水を供給している。また、背振山系山裾の標高は約50～60mであり、三河川の河口は玄界灘に注いでいるため、水田と利用されている沖積地も扇状地的要素が強い。このことは、河川に井堰が多いことや、また、国道202号線・JR筑肥線の南側の水田が冬期に乾いていないことから理解できる。

また、沖積地間では、標高約100～150mの山塊や背振山系から南に派生する標高約50～60mの台地（丘陵）があり、これらは洪積世の土壌で、表層には赤茶色のロームが乗っている。これらは、土地利用としては山林・畑などであり、現在、みかん畑等になっている。

このような地形的形状から、瑞梅寺川の河口は博多湾（今津湾）に、雷山川・長野川のそれは唐津湾（加布里湾）に注いでいるため、沖積地の一部は‘糸島水道’として両湾はつながり、ある程度の船舶の航行等は可能といわれてきていた。しかし、近年の地質学的調査や埋蔵文化財発掘調査の成果で、水道の存在を否定する考えもでてきている状況である。

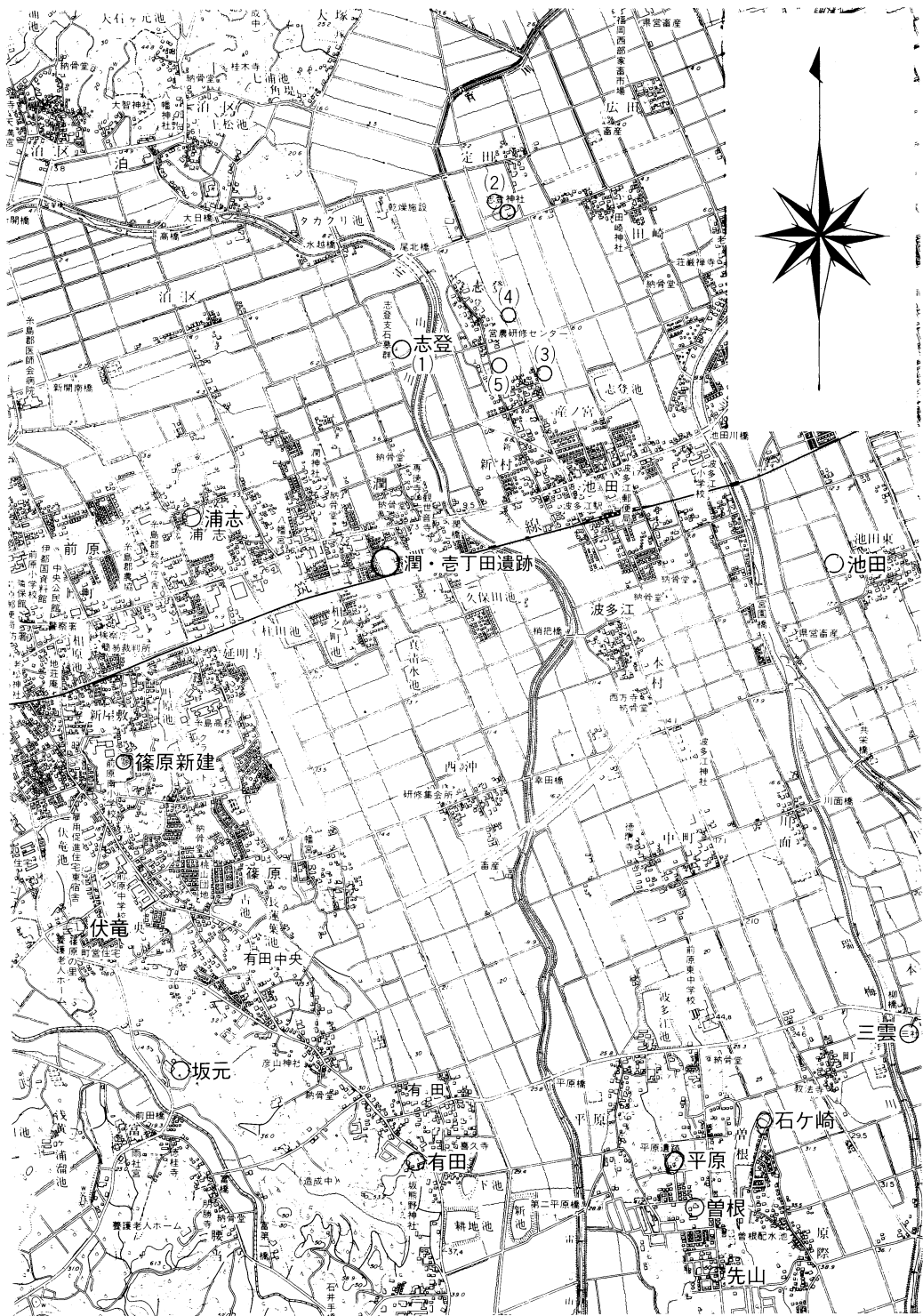
気候的には、割合に温暖で、昭和62年の夏季平均気温24.4°・冬季平均気温7.3°・年平均15.5°であり、年間降雨量1,880mmである。

2 歴史的な環境

北部九州・特に玄界灘沿岸の地域は、原始・古代から中近世の数多くの文化財をみることができる。特に、糸島地方は、所謂『魏志』「倭人伝」にみる伊都国の地として比定され、福岡・春日市周辺の奴国・唐津市周辺の末盧国とともに対比され、また、考古学的発掘調査によってその成果が蓄積されてきている。

潤・壱丁田遺跡は、前項で記した沖積地上に立地し、雷山川の左岸に位置する。

遺跡の北側には、国史跡志登支石墓群^{注1}があり、支石墓・甕棺墓等が文化財保護委員会で調査され、柳葉式石鏃が出土するなどしている。また、志登周辺では泊地区県営ほ場整備事業が実



第2図 潤・志丁田遺跡の位置 (1/25,000)

施され、数ヶ年にわたり、町教育委員会で発掘調査を実施してたきが、古墳時代前期から鎌倉時代中頃までの生活遺構などを調査できた。さらに北側の志摩町馬場地区^{注②}では、時代は下るが、『日本書紀』欽明紀には、当時水軍に任わっていたとされる肥（火）君の一派がいたことが、『大宝2年筑前国嶋郡川辺里戸籍』^{注③}で推測でき、今後の課題ともいえる。

西側には、約650mには小銅鐸を出土した浦志遺跡、また弥生時代中頃の甕棺墓群などの向原遺跡・篠原新建遺跡がある。後者の南方約600mには現在前原町立養護老人ホーム篠原の里があるが、この地には伏龍遺跡があり、弥生時代終末の甕棺墓・古墳時代前期の方形墳などが調査され、古墳時代前期の前方後円墳などとの関係が課題となりそうである。さらに東南側約650mに坂元古墳群があり、古墳時代後期の円墳3基が調査され、2号墳からは製獣文鏡・銅釧が出土している。

南側には、背振山系から南に派生する丘陵（所謂・曾根丘陵）上には曾根遺跡群があり、平原遺跡（方形周溝墓・円形周溝墓など）・銭塚古墳（前方後円墳）・狐塚（円墳）・ワレ塚古墳（前方後円墳）からなり、国史跡となっている。平原遺跡の東約300mには石ヶ崎支石墓がある。支石墓・甕棺墓等が調査され、支石墓出土の碧石製管玉は、井田用会支石墓出土のそれと同様、年代的には再考の必要があるようだ。また、平原遺跡の西側約1kmにある有田1号墳は前方後円墳であり、曾根遺跡群の前方後円墳との間に雷山川が北流しており、時期的前後関係はもとより今後の成果を期するものであろう。

曾根丘陵の東側には、瑞梅寺川・河原川に挟まれた地には、まさに「伊都国」の中心地・三雲遺跡があり、多大の成果をあげている。特に、三雲南小路遺跡の1・2号甕棺墓出土の舶載品の銅鏡等は目を見はるものであり、天明年間出土の井原ヤリミヅ遺跡・前述した平原遺跡の銅鏡とともに、『魏志』倭人伝の内の「世有王」を裏付けるものであろう。

三雲遺跡の東側、高祖山の西麓に立地する怡土城は、『続日本紀』に記載されており、文献の記述と遺跡の所在地が確認される古代山城で、756（天平勝宝8）年に築城され、768（神護景雲2）年に完成したとされている。

怡土城の北側には福岡市西区周船寺という地名があり、『令集解』菅繕令にみる「主船司」と比定でき、水軍の拠点として対外交渉の地であったとする説^{注⑤}もある。

参考文献

注(1)、斎藤忠・鏡山猛編『志登支石墓群』1956年

(2)、是松茂男「筑前国嶋郡川辺里の位置」（『伊都』1969年）

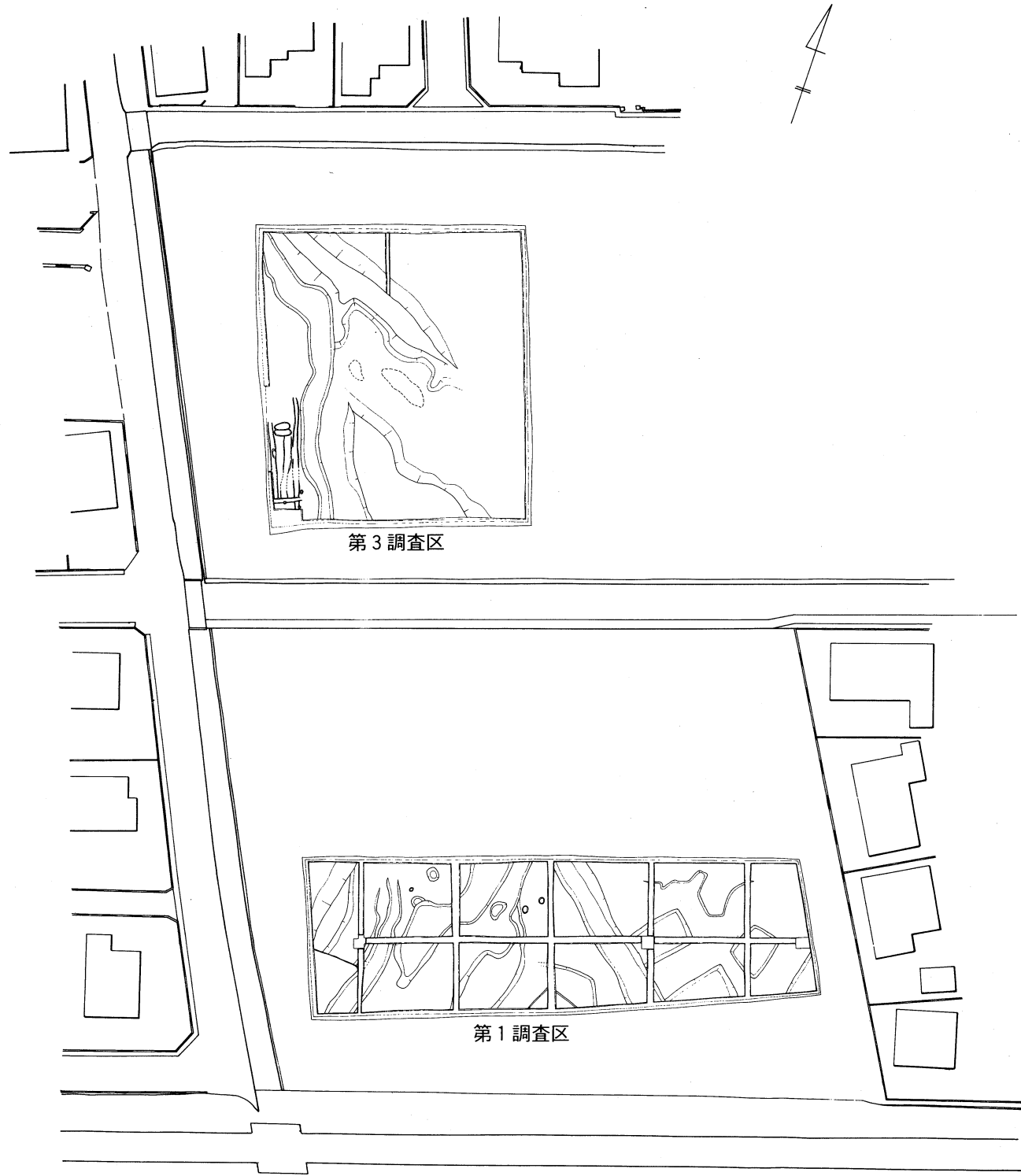
(3)、「大宝2年筑前国嶋郡川辺里戸籍」（『寧楽遺文』・上巻・95頁）

(4)、柳田康雄編『三雲遺跡・南小路地区編』（福岡県文化財調査報告書第69集・1985年）

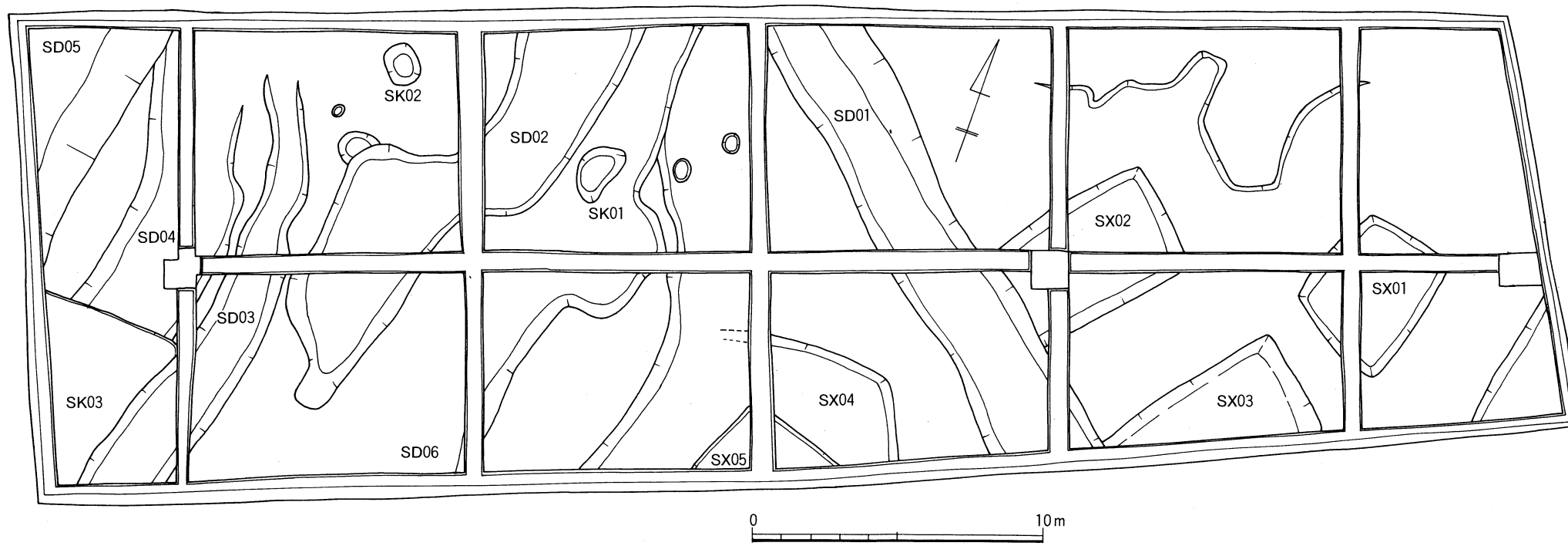
(5)、長 洋一「天平宝字五年の肥前国」（西南学院大学国際文化論集1・2号・1986年）



第3図 潤・荅丁田遺跡位置図 (1/5,000)



第4図 潤・吉丁田遺跡遺構位置図 (1/600)



第5図 第1区調査区遺構配置図 (1/200)

Ⅲ 調査の内容

1 調査の概要

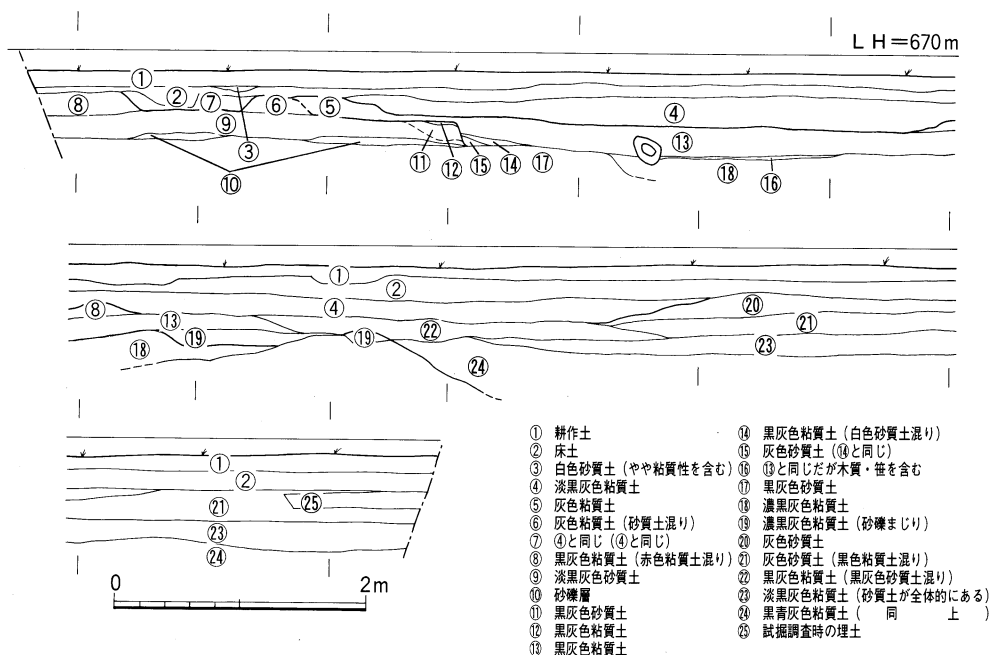
I章で前述したように、試掘調査で土師器等が出土したため、本調査を実施することにした。調査区を第1～3区と設定し調査した結果、第1区で溝状遺構6条・土壇3基・不明遺構5ヶ所を、第3区では溝状遺構8条を検出した。第2区については、調査途中、マンション建設の計画変更等がなされたため、遺構検出作業等を中止して、第1・3区の調査終了とともに埋戻しを行った。

2 第1区の調査

第1区発掘調査区は、南北方向に約17m、東西方向に約43mからなる長方形であり、面積は約731㎡になる。遺構検出面は黒灰色粘質土が主となるが、そのなかに砂礫及び笹等の植物を包含するものもある。地形的に沖積地の湧水地域に位置するため、調査時も湧水に悩まされることが予想されたが、予想に違わず調査区全体から多量の湧水がみられた。また、例年にない降雨も手伝って、一夜にして冠水状態となることが多かった。そのため、調査期間を通して水との戦いが続いた。

検出遺構

検出した遺構面は東から西へゆるやかに傾斜している。調査は現代の水田層である暗茶黒色



第6図 第1調査区西側壁面土層図 (1/60)

粘質土まで表土剥ぎを行うことにより開始した。調査区の東側は、遺構面である黒灰色粘質土層の下に灰白色砂質土層が全体的に薄く堆積し、その下には再び黒灰色粘質土層が続く。この層序は一時的な水害によるものと考えられる。

西側は遺構面である④層・淡黒灰色粘質土層の下には⑬層・黒灰色粘質土層が堆積する。その下には⑬層・淡黒灰色粘質土層が堆積し、さらにその下には⑭層・黒青灰色粘質土層がみられる。なお、⑭層の下には砂層がある。以上が西側の主な層序である。特に⑤層・灰色粘質土層、⑥層・灰色粘質土（ただし砂質土を含む）、⑧層・黒灰色粘質土（ただし赤色粘質土を含む）を畦畔と考え、④層は平安期の水田と想定し得る可能性がある。さらに、⑪層・黒灰色砂質土、⑫層・黒灰色粘質土を畦畔と考え、⑬層は古墳時代布留期の水田跡と想定し得る可能性がある。

溝状遺構

- SD01 調査区の中央部で検出したもので、南側より北東方向へ流れる。溝の幅は、上端で3.0～3.5m、下端で1.5～2.0m、深さ約0.17～0.35mである。土師器と木器が出土している。
- SD02 調査区の西側で検出したもので、南側より北北東方向へ流れる。溝の幅は上端で2.4～3.5m、下端で1.8～3.5m、深さ約0.1～0.13mである。土師器が出土している。
- SD03 調査区の西南隅部で検出したもので、南側より北方向へ流れる。溝の幅は上端で1.2m～2.5m、下端で1.3～2.0m、深さ約0.05～0.1mである。出土遺物はない。
- SD04 調査区の西側で検出したもので、SD03に臨接して、南側より北方向へ流れる。溝の幅は上端で3.0～3.8m、下端で2.0～2.5m、深さは約0.085～0.1mである。土師器の細片が出土しているが、図示し得ない。
- SD05 SK03に切られた調査区北西隅部で検出した。調査区北西隅部より、北壁方向に約5.0m、西壁方向に約8.0m程のひろがりをもつ。南側より北方向へ流れる。溝の最大幅は、上端で4.2m、下端で2.5mをはかる。深さは0.17～0.73mである。土師器が出土している。
- SD06 調査区の南側で検出したもので、SD02に臨接し北方向に流れる。溝の幅は上端で2.0～5.5m、下端で1.5～4.0m、深さ約0.025～0.1mである。出土遺物はない。

土壇

- SK01 SD06の中に検出された楕円形の土壇である。南北長2.0m・東西長1.5m・深さ0.15mをはかる。なお、土師器が出土しているが図示しうるものではない。
- SK02 調査区の北壁付近で検出した楕円形の土壇である。南北長1.5m・東西長1.1m・深さ0.23mをはかる。なお、土師器が出土しているが図示しうるものではない。
- SK03 調査区の西南隅部で検出した6.0m×5.0mをはかる長方形の土壇である。深さは0.12mほどで、底面はほぼフラットである。なお、底面の黒灰色粘質土のなかに笹等の植物が包含されている。出土遺物はない。

不明遺構

SX01 調査区の南東隅部付近で検出された長方形の遺構で、3.0m×4.5mをはかる。深さは0.07mほどで底面はほぼフラットで、黒灰色粘質土である。なお、土師器が出土しているが図示できうるものではない。

SX02 SD01と接し、SX03にほぼ平行に位置する長方形の遺構で、4.0m×5.5mをはかる。深さは0.1mほどで底面はフラットで、黒灰色粘質土である。なお、土師器が出土しているが図示できるものではない。

SX03 SX01の西南方向に位置し、SD01に接する長方形の遺構である。4.0m×6.8mをはかり、深さは約0.4mで、底面はほぼフラットである。底面の土層は黒灰色粘質土である。なお、土師器が出土しているが図示できうるものではない。

SX04 調査区の南壁中央部付近に検出された長方形の遺構である。2.0m×4.0mをはかり深さは約0.2mほどで底面はフラットである。底面の土層は黒灰色粘質土である。なお、出土遺物はない。

SX05 SX04の南方に位置し、調査区南壁に接する長方形の遺構である。3.0m×3.8mをはかり、深さは約0.12mほどである。底面はフラットで土層は黒灰色粘質土である。なお、出土遺物はない。

出土遺物

土器

SD01出土土器

1は外反する二重口縁で、口縁端部は凹み、内傾する。外面肩部に黒斑をみ、胴部内面はスス・底部にはオコゲをみる。2は直線的に外反する口頸で、口頸部内面にヨコハケ目、胴部外面の大半はタテハケ目を施し、外面にはスス、内面にスス、オコゲをみる。胴部形状は楕円状であり、器形の形状から在地系のものであろう。

SD02出土土器

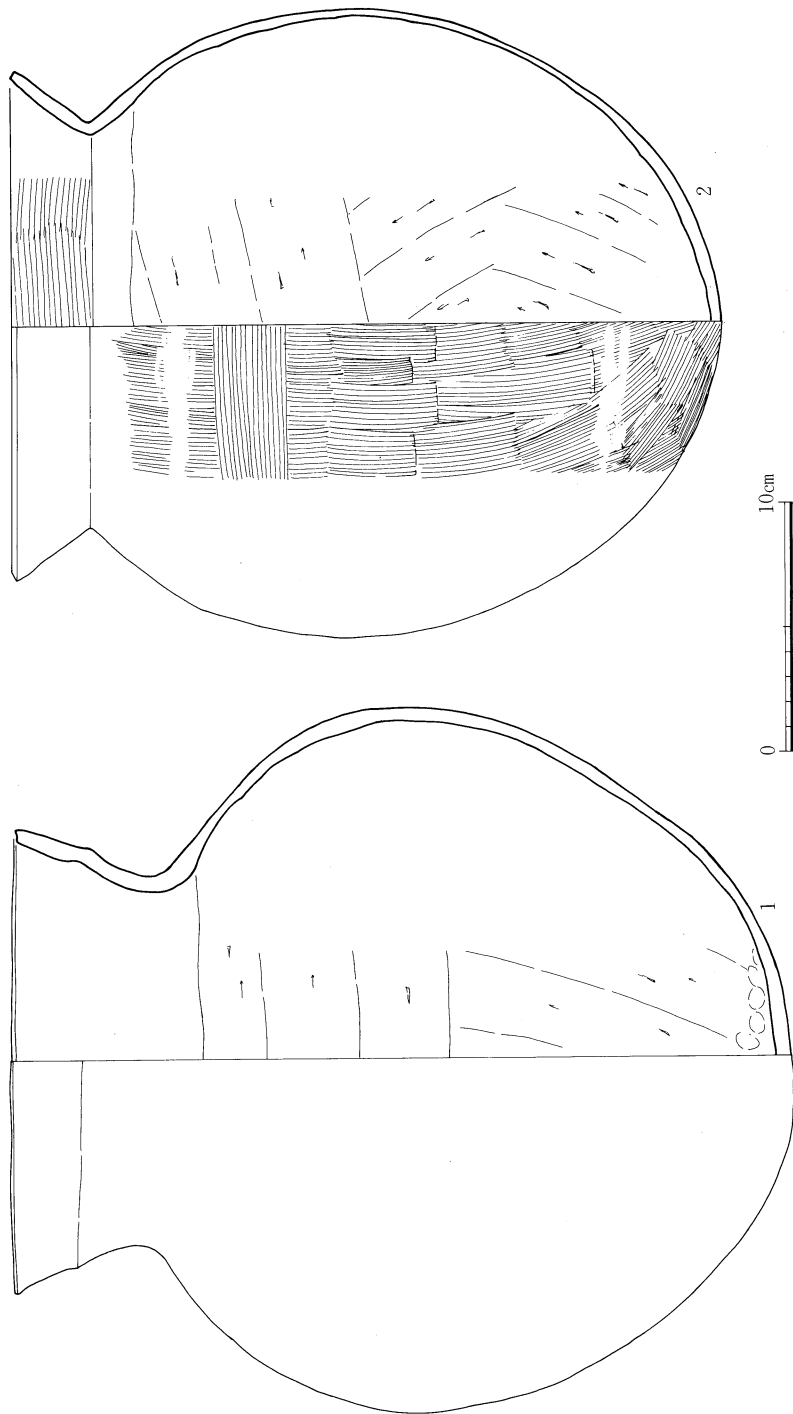
3は長胴系の甕で、胴部肩部に6ヶ所の刺突文をみるが、全周していない。刺突文の下部にヨコハケ目をみ、口縁端部はわずかに凹む。

SD05出土土器

4は二重口縁の壺で、頸部外面は強いヨコナデを施し、5は高坏の坏部であるが、内外面研磨している。また、脚部との接合部や内外面に研磨後漆塗りを施しているため、接合部がはなれた後、椀として使用していたようである。6は脚部の外面に暗文を施しており、7は二重口縁の大型壺となる器形で、胴部上半部はヨコハケ目である。

木器

SD01出土木器



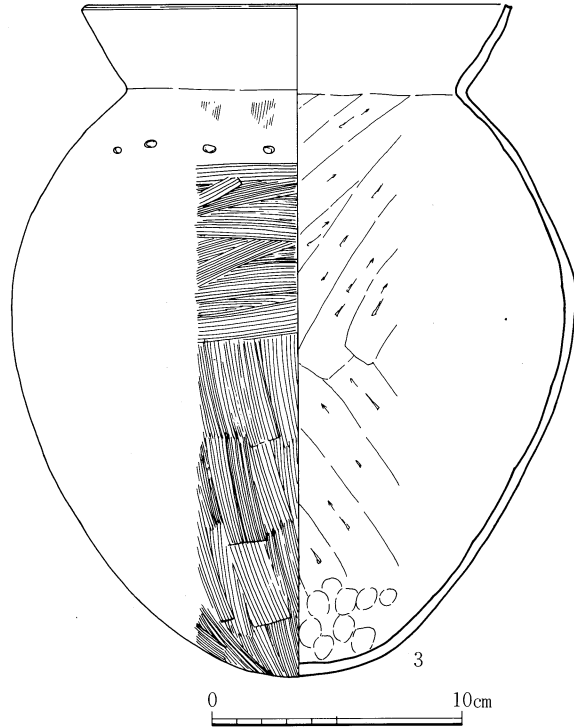
第7図 SD01出土土器実測図 (1/3)

SD01からは4個体ばかり木製品が出土した。1は欠損が著しいために、遺物本来の寸法は不明であるが、残存状況から考慮して縦約19.5cm・横約70cmをはかると思われる。厚さは約1.5cmほどである。端部より約11cmほどの所に約5.0cm×10cm、深さ約0.5～0.7cmほどの溝が穿たれている。その穿たれている溝を挟んで実測図には記載していないが両サイドへの削り痕がみられる。

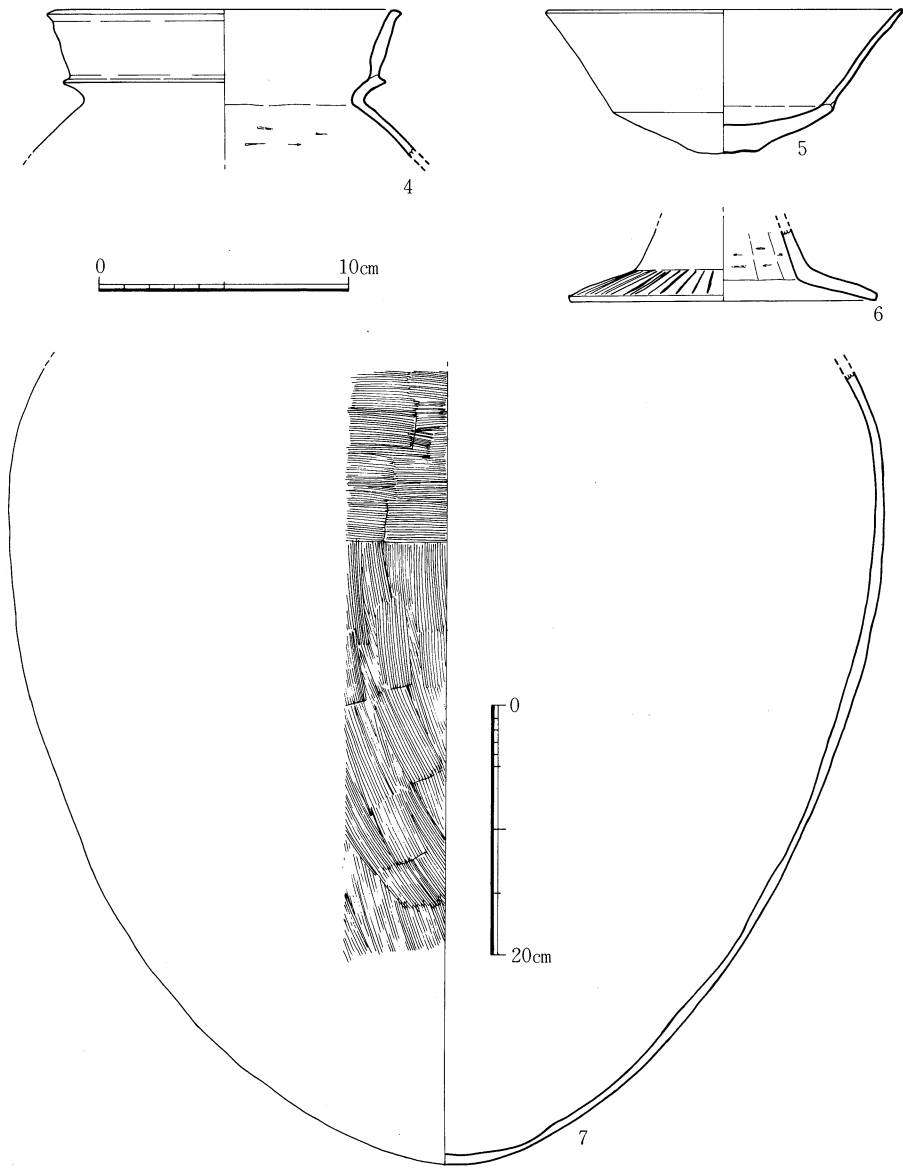
2は縦約10cm・横約30cm・厚さ約2.0cmをはかる。これも実測図には記載していないが、若干の削り痕がみられる。なお、この木器は中央部を穿たれている。

3は杭状の木器である。縦は欠損しているため、寸法は不明であるが横は径7.0～8.0cmをはかる。この木器は手に持ちやすいように加工してある削り痕がみとめられる。その一方において他の部分は特別な加工痕がみられないことから、杭、もしくは棚状木製品の一部である可能性があると思われる。

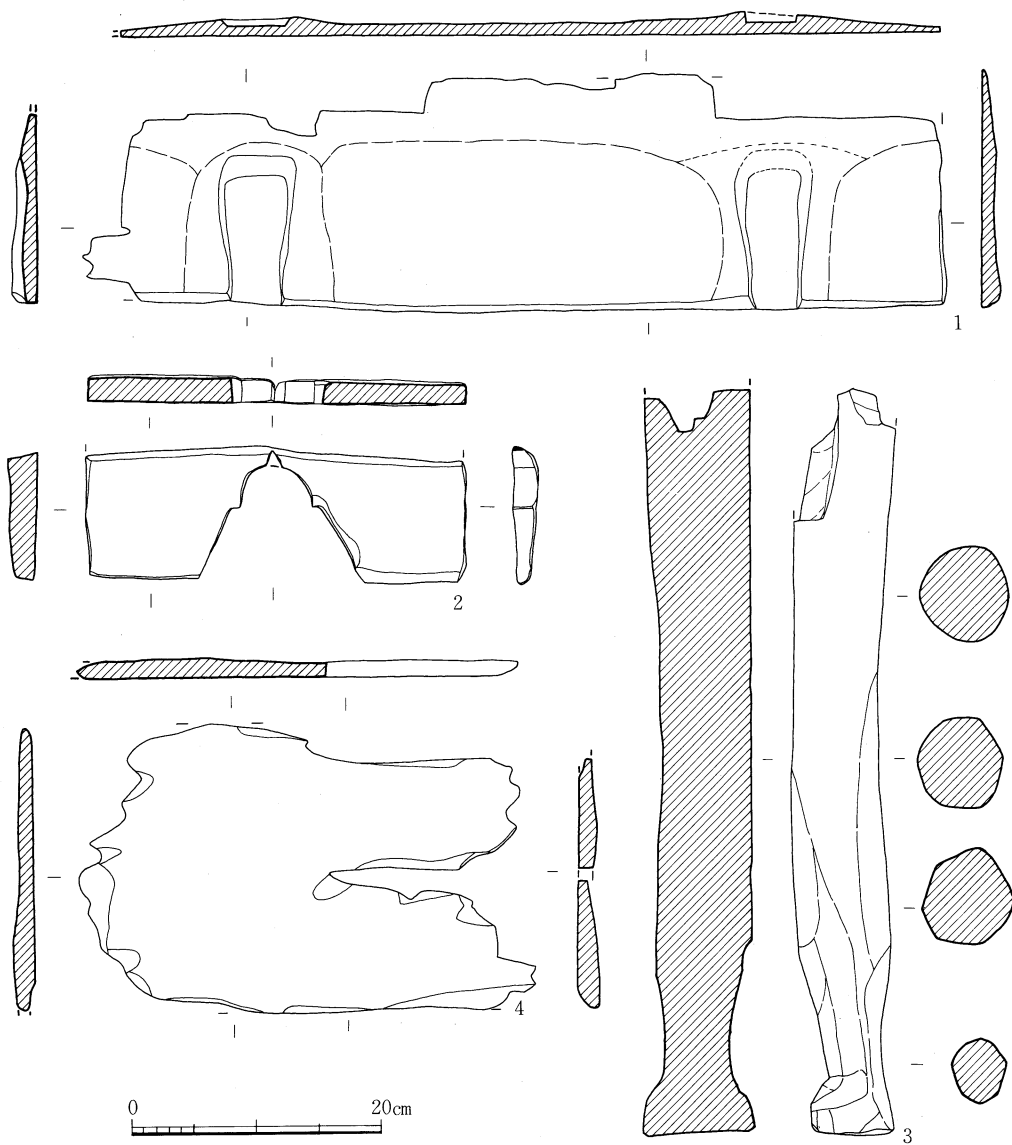
4も欠損が著しいため、遺物本来の寸法は不明である。但し、残存状況から考慮して縦約23cmをはかると思われる。厚さは約1.0～1.5cmほどをはかる。表面には特別に削り痕もなく、二又に見える部分も欠損によるものと思われることから、この木器は板の可能性が強いと思われる。



第8図 SD02出土土器実測図 (1/3)



第9図 SD05出土土器実測図(4~6 : $\frac{1}{3}$; 7 : $\frac{1}{6}$)



第10図 第1区出土木製品実測図 (1/6)

3 第3区の調査

第3区発掘調査地は南北方向に約32.2m、東西方向に約27.5mからなる長方形で、面積は約885.5㎡ほどである。遺構検出面は黒灰色粘質土が主となるが、当区も第1区と同じく砂礫及び笹等の植物を包含するものもある。調査区は第1区に比べ若干標高が低い湧水地に位置するため、調査時も第1区以上に湧水に悩まされることが予想された。その予想に違わず、第1区以上に調査区全体から多量の湧水がみられ、また例年のない降雨、特に当区に関しては2度もわたる台風襲来の憂き目にあい一夜にして調査区が冠水する次第であった。そのため調査期間中を通して水との戦いが続いた。

検出遺構

検出した遺構面はSD02～SD05が位置する黄褐色粘土層からゆるやかに放射状に傾斜している。その途中、調査区の南北壁に接して所在している砂礫層で再び標高が若干上がるが、その砂礫層を越えると再び黒灰色粘質土がゆるやかに傾斜して行く。第3区の土層は、特別な部分を除き現代の耕作土である表土の下には砂礫層が調査区全体に堆積し、その下層に主な遺構面である黒灰色粘質土が検出される。この黒灰色粘質土からは、布留式土器が出土することから第1区とほぼ同時期と考えられる。

以上から、第3区の基本的土層は、上層より表土→砂礫層→黒灰色粘質土となっている。黒灰色粘質土の上層には砂礫層が全般的に堆積していることから、一時的な洪水があったと思われる。部分的にみて行くと、砂礫層が小島状にみられ、層位的には、砂礫層→青灰色粘質土→黒灰色粘質土層となっている。

溝状遺構

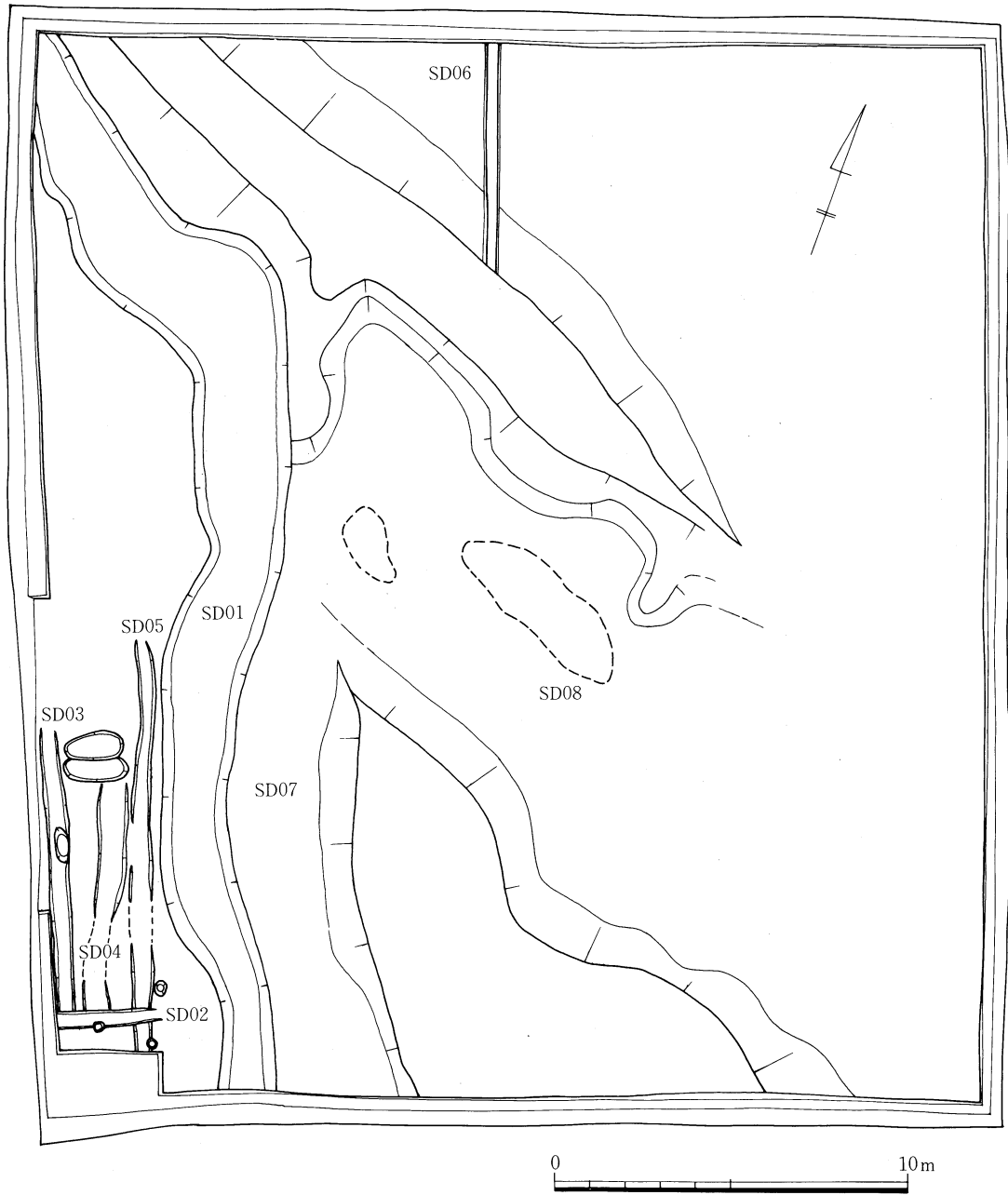
SD01 調査区の西側で検出したもので、南側より北方向へ流れ、途中で北西方向へ流れを変える。溝の幅は、上端で1.5～3.7m・下端で0.75～3.0m・深さ0.072～0.21mで、北西側の下流の方が幅広く、深くなっている。埋土は黒灰色砂質土でわずかに粘性にとんだものであり、出土遺物より、中世紀のものである。なお、出土遺物は図化しうるものではない。

SD02 調査の南西隅で検出し、SD01・SD03・SD04を切っており、柱穴状ピットに切られている。西側より東側へ流れ、溝の幅は、上端で0.4～0.5m・下端で0.25～0.35m・深さ約0.1～0.3mである。出土遺物はない。

SD03 SD02に切られた、調査区西側隅で検出した。南側より北方向へ流れ、溝の幅は、上端で0.5～0.6m・下端で0.35～0.40m・深さ0.1～0.17mである。出土遺物はない。

SD04 SD02に切られた、調査区西側隅で検出した。SD03とSD05の間を北方向へ流れ、溝の幅は上端で0.5～0.9m・下端で0.4～0.7m・深さ0.01～0.07mである。出土遺物はない。

SD05 SD02に切られた、調査区西側隅で検出した。SD04とSD01の間を北方向へ流れ、柱



第11図 第3調査区遺構配置図 (1/200)

穴状ピットに切られている。溝の幅は上端で0.4～0.7m・0.25～0.4m・深さ約0.08～0.21mである。出土遺物はない。

SD06 調査区の北東隅部で検出したもので北東隅部から調査区北壁約22m・東壁約16mほどのひろがりをもつ。溝の最大幅は、上端で14.5m・下端で12.8m・深さ約0.443mである。土師器が出土している。

SD07 調査区の西側で検出したもので、南側より北北西方向へ流れ、途中で北方向へ流れを変える。溝の幅は、上端で3.4～4.0m・下端で2.2～3.5m・深さ約0.01～0.013mである。土師器が出土しているが図示しうるものではない。

SD08 調査区の中央部で検出したもので、中央部より東南東方向へ流れる。溝の幅は上端で4.0～11.0m・下端で3.5～7.2m・深さ約0.2m～0.25mである。この遺構の中央部には土器溜まりがあり土師器を検出している。

出土遺物

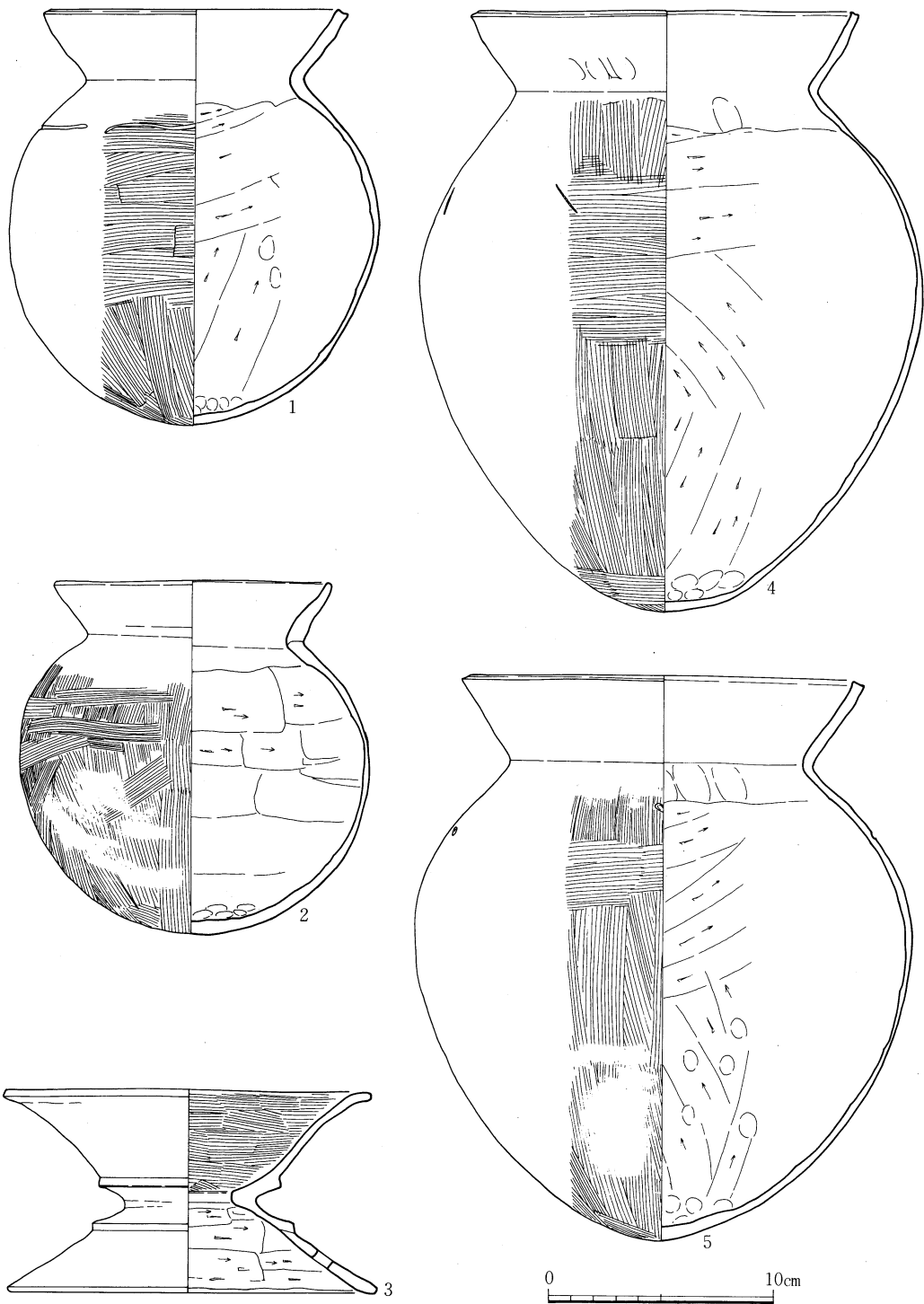
土器

SD06出土土器

1は肩部に沈線文をみ、土器の上からみれば右廻りに施されている。沈線文の周囲から胴部中位までヨコハケで、外面にスス付着・内底部にオコゲをみる。2は胴部上半部にヨコハケを意識したように施されている。胴部下半部にススの付着をみる。割合に雑な造りであることが口頸部などからうかがえる。3は鼓形器台で、外面はヨコナデ、坏部内部は非常に荒いハケ目を施して、脚部に1ヶ所の穿孔をみる。4は肩部にハケ目状工具による刺突文を7ヶ所みる。口縁端部はつまみ上げ、凹みをみる。5は肩部に4ヶ所の刺突文をみ、その下部にヨコハケをみ、口縁端部は凹む。6は口頸部を欠損し、胴部上半部にヨコハケの上にナナメハケを施している。7は口縁部が直立し、口縁端部が内傾し、頸部に台形状凸帯をみる。大型品である。

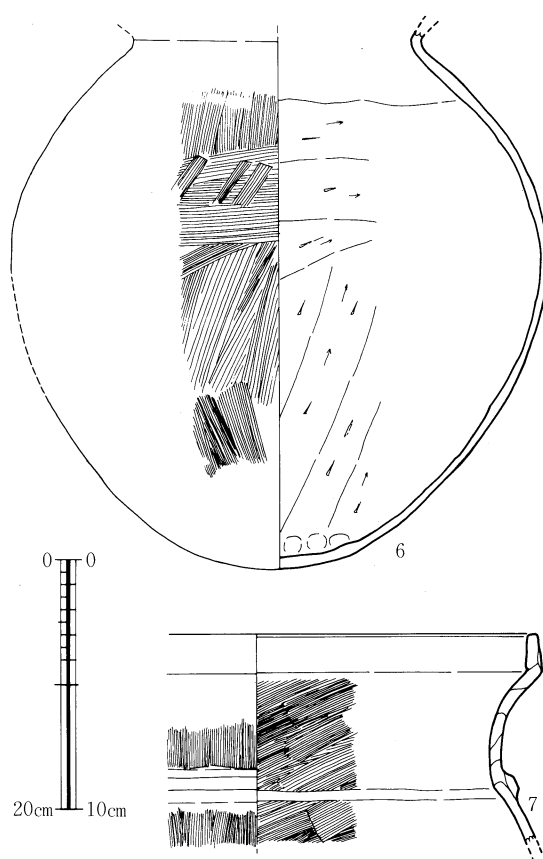
SD08出土土器

8は肩部に3個の刺突文とわずかな長さの沈線文をみる。9は肩部に波状沈線文をみるが全周せず、右廻りの施文である。胴部外面下半にスス、内底部にオコゲをみる。10は丁寧な造りで、胴部内面にミガキをみる。11は胴部に三帯のヨコハケをみる。12は他の壺に比して、丸味のある口唇部である。13は胴部に大きな黒班をみる。14も丁寧な造りで、二重口縁を有し、胴部下半部はミガキ後暗文を施している。14は鼓形器台で、外面はヨコナデ・坏部内面はヘラミガキを施している。16は外底部が剥落しているため椀または脚付椀であろう。17～19は小型丸底埴で、19は口頸部外面にヨコナデ後ヘラミガキを、胴部外面にヘラミガキを、口頸部内面にハケ目をみる。20は直口壺で、外面はハケ目後にミガキを、頸部内部にハケ目を、胴部内面にヘラ削り後のナデをみる。21～23は鉢で、21は内外面丹塗りで、23は胴部外面にススが付着している。24はわずかな現存であるが摺鉢になるものであろう。25は高坏坏部で外面に黒班をみ

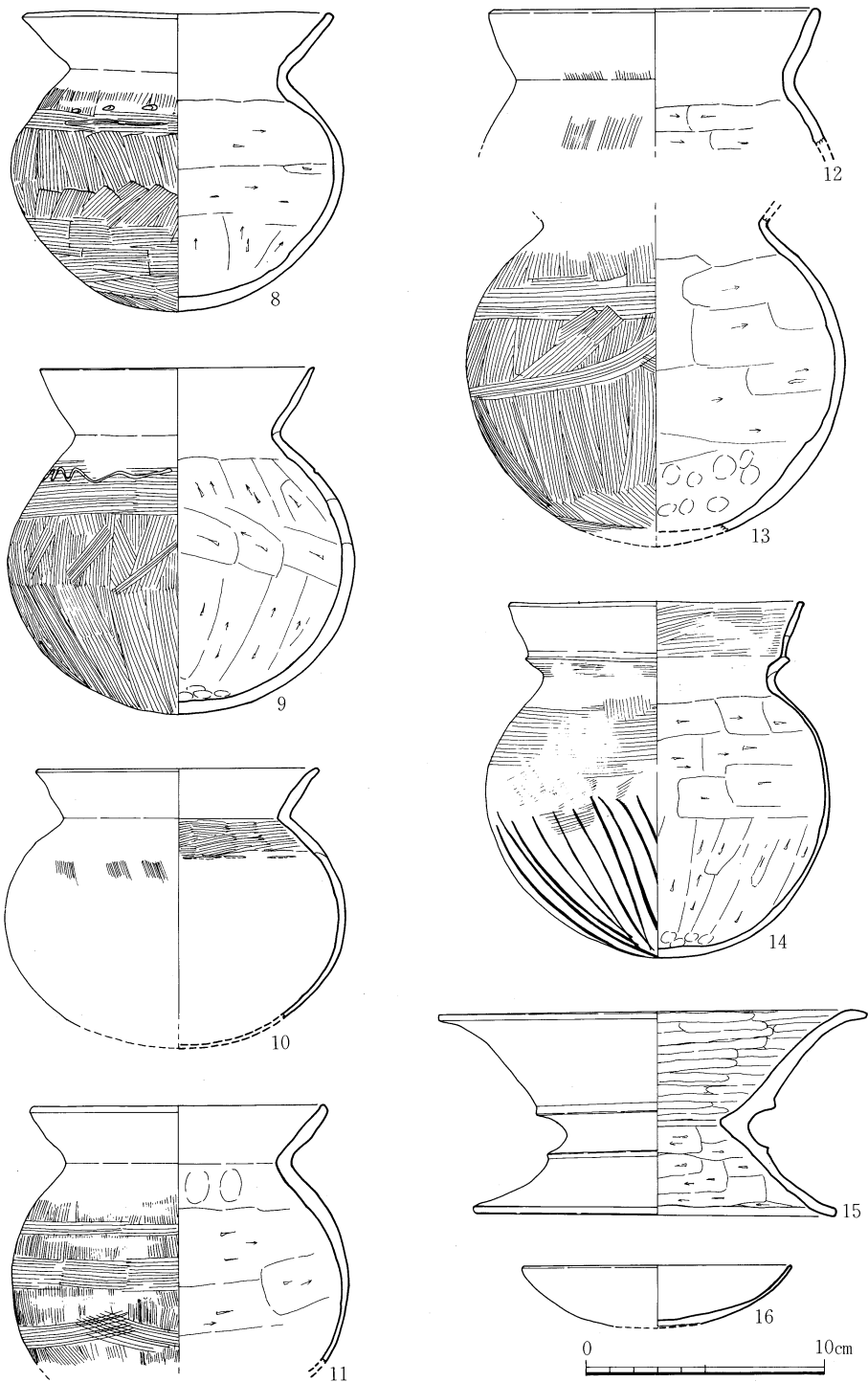


第12図 SD06出土土器実測図 (1/3)

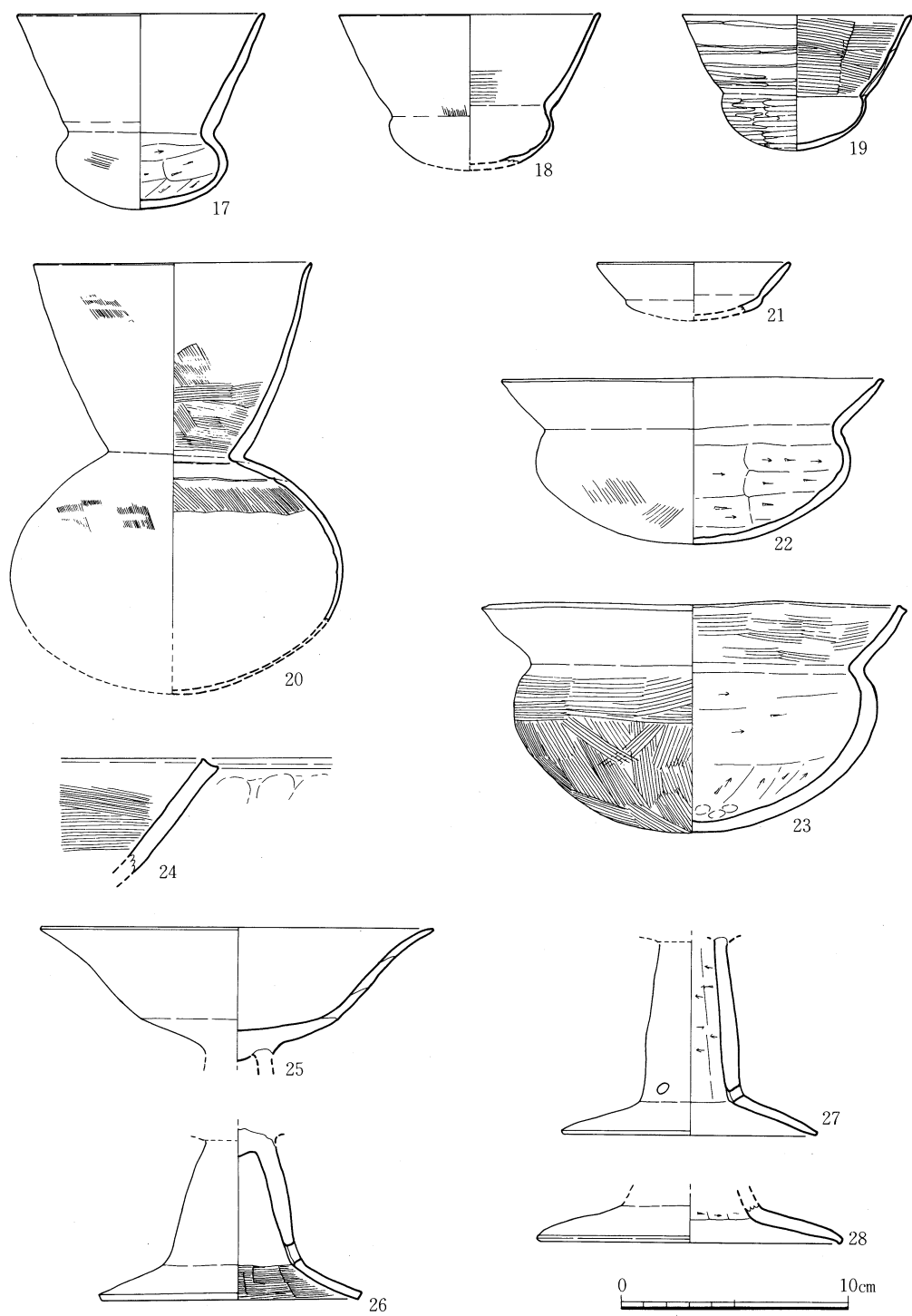
る。26～28は高坏脚部で、26には2ヶ所、27には3ヶ所の穿孔をみる。29～35も高坏で、29は坏部口唇部を欠損しているが、坏部外面ミガキ・内面ミガキ後暗文を、脚部外面ハケ目後ミガキをしヘラミガキをしている。30は坏部外面にハケ目・ヘラミガキをして坏部・脚部の接合部より坏上方に向って暗文を施し、内面にハケ目後、横方向・縦方向と二度暗文を施文して、脚部外面はハケ目・ミガキ・暗文の順で施文している。31は坏部内外面に暗文をみる。外面はハケ目→ヨコナデ・ナデ→暗文の順で、内面はハケ目→暗文の順で、脚部外面はハケ目→ヘラミガキ→暗文の順で施している。32は31と同様で、坏部外面はハケ目→ヨコナデ→暗文の順で施し、暗文は接合部から坏部上面に施文しており、内面はハケ目→暗文の順で、脚部外面はハケ目→ヘラミガキの順である。33は坏部内外面ともにハケ目→暗文の順で施し、外面は一部ハケ目をナデ消そうとしている。脚部外面はハケ目の後で部分的にヨコナデをみる。34は坏部のみで、外面はヘラミガキ後非常に細かい暗文を、内面上半はハケ目後ナデを、下半部にはハケ目後暗文をみる。暗文は下方から上方へそして下方へと施文している。35も坏部のみで、外面と内面下半部の暗文は34の内面下半部と同じ施文方法をとっており、内面上半部の暗文は一部しかみることはできない。なお、29～33の脚部には3ヶ所の円孔をみる。36～61は甕である。36～41には肩部に波状沈線をみるが、36・37は全周してはいるものの始終が一致していない。38は半周のみで、39は途中で交わり、40は36と同様である。41は2ヶ所で沈線が切れている。また、40のみは沈線の施文が上方からみれば左廻りである。39の胴部外面に一部平行タタキ目をみる。36～40には胴部外面にススが付着し、38・39にオコゲをみる。42は肩部に1条の沈線とその下部に4ヶ所の刺突文をみ、胴部外面にススをみる。43は4条の沈線をみるが半周をしていなく、44の沈線は全周しているが始終が一致していない。45はタタキ目をみ、ハケ目の後に肩部に細かい沈線を施している。43～45ともに外面



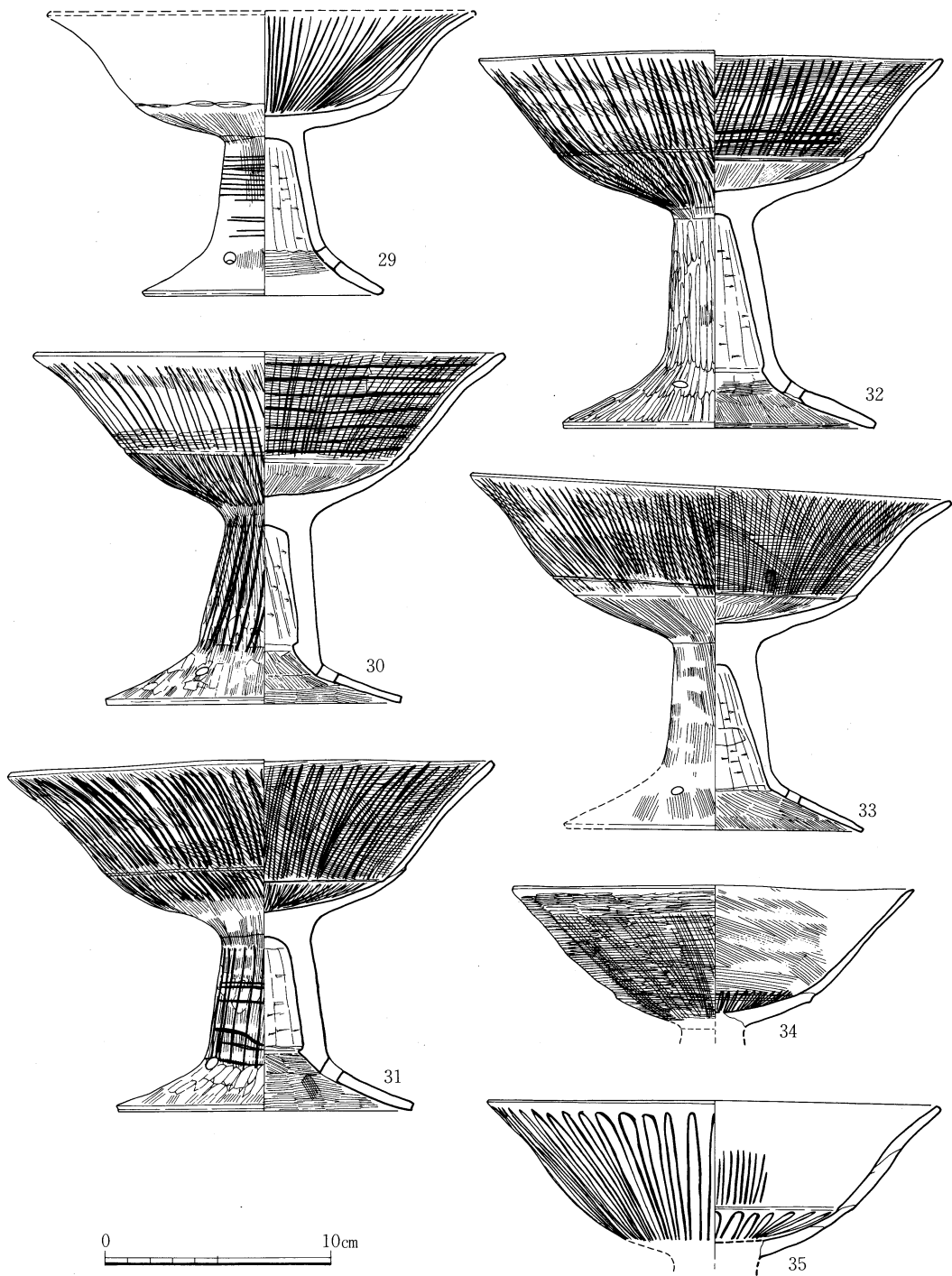
第13図 SD06出土土器実測図 (6 : $\frac{1}{3}$ 7 : $\frac{1}{6}$)



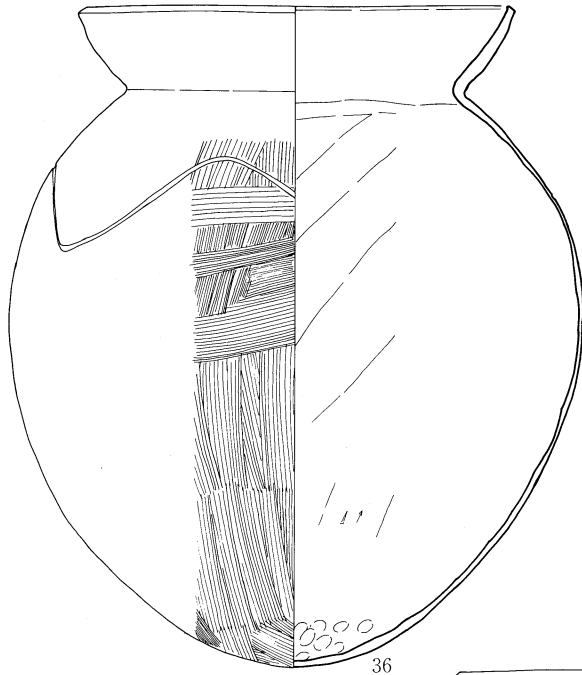
第14图 SD08出土土器实测图 (1/3)



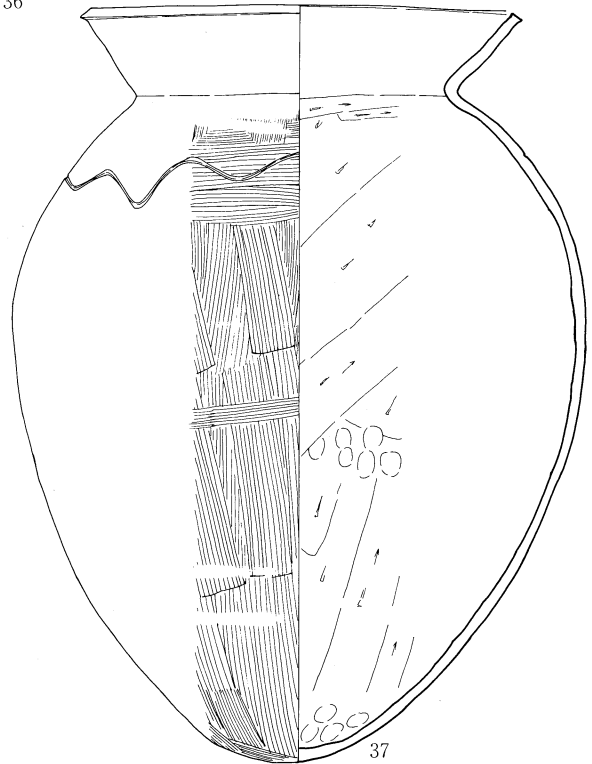
第15图 SD08出土土器实测图 (1/3)



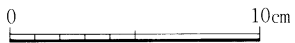
第16图 SD08出土土器实测图 (1/3)



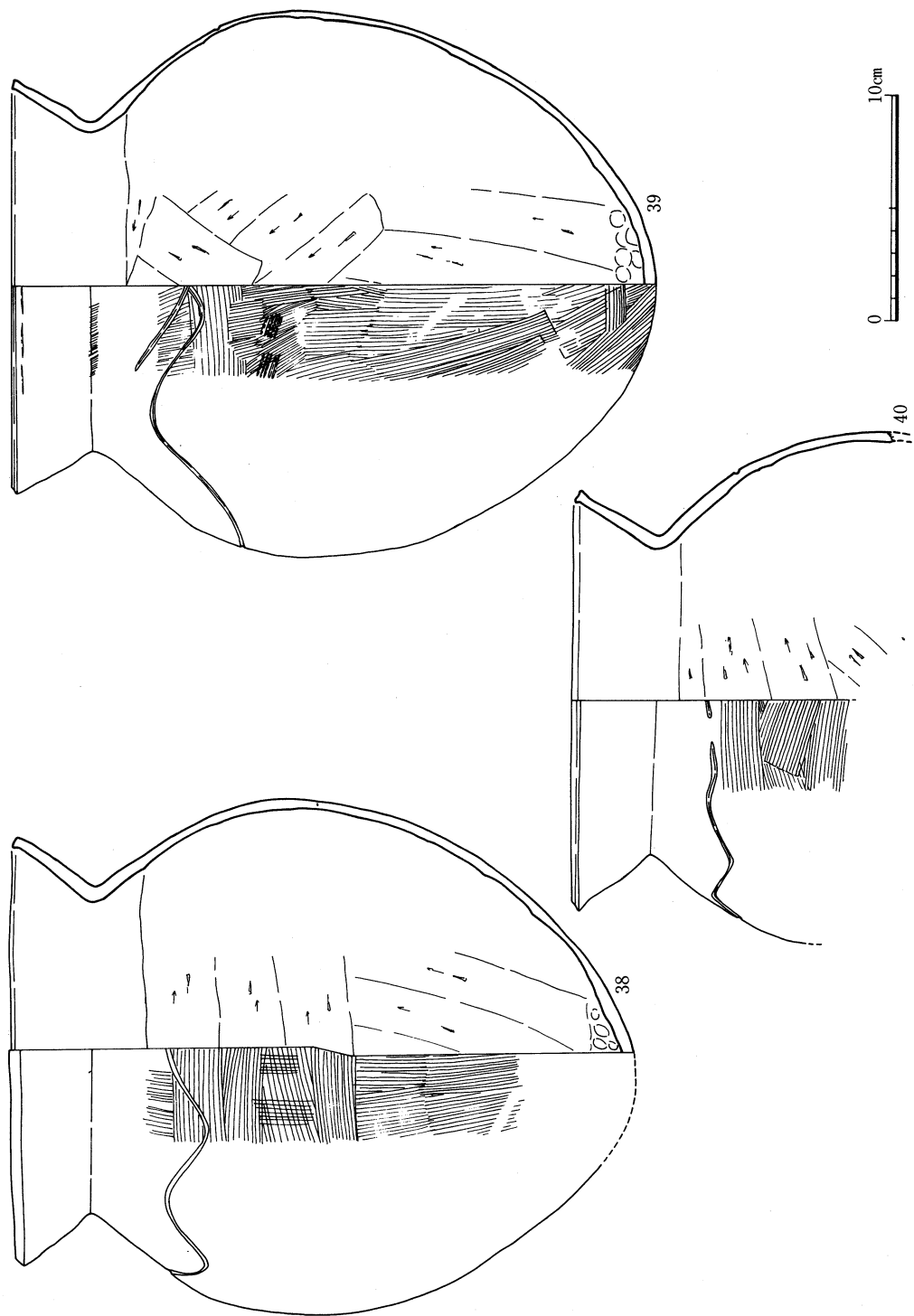
36



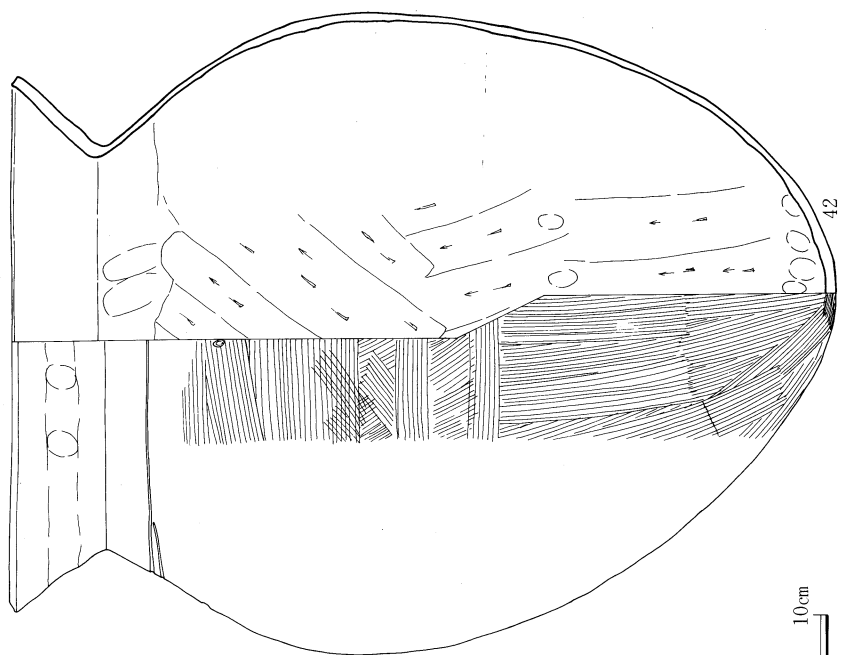
37



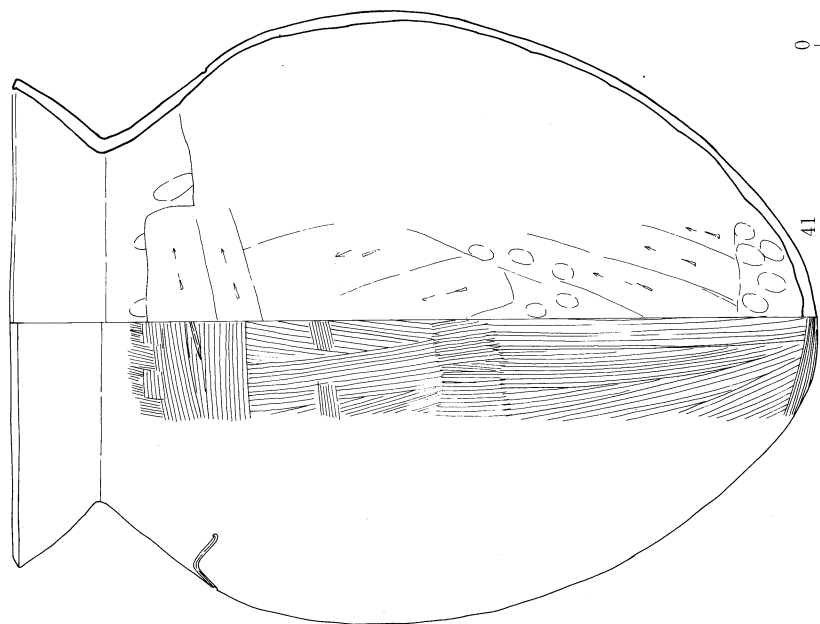
第17图 SD08出土土器实测图 (1/3)



第18图 SD08出土土器实测图 (1/3)

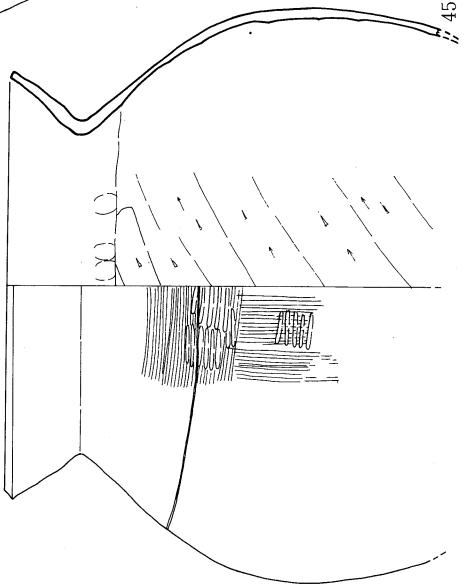
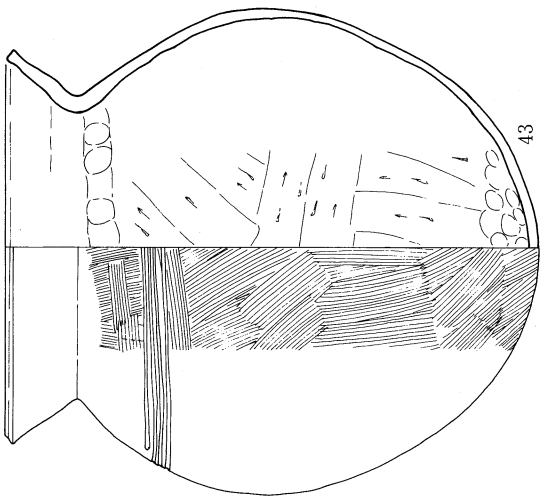
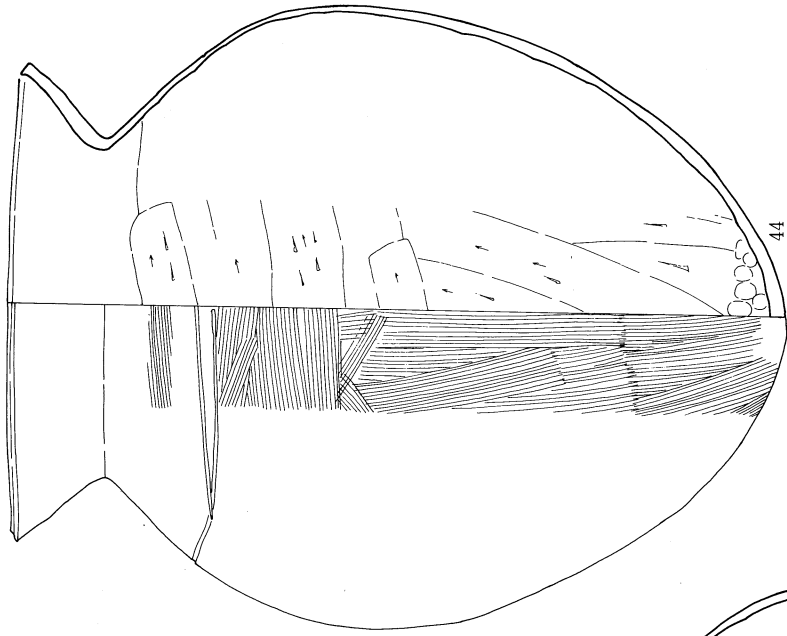


42

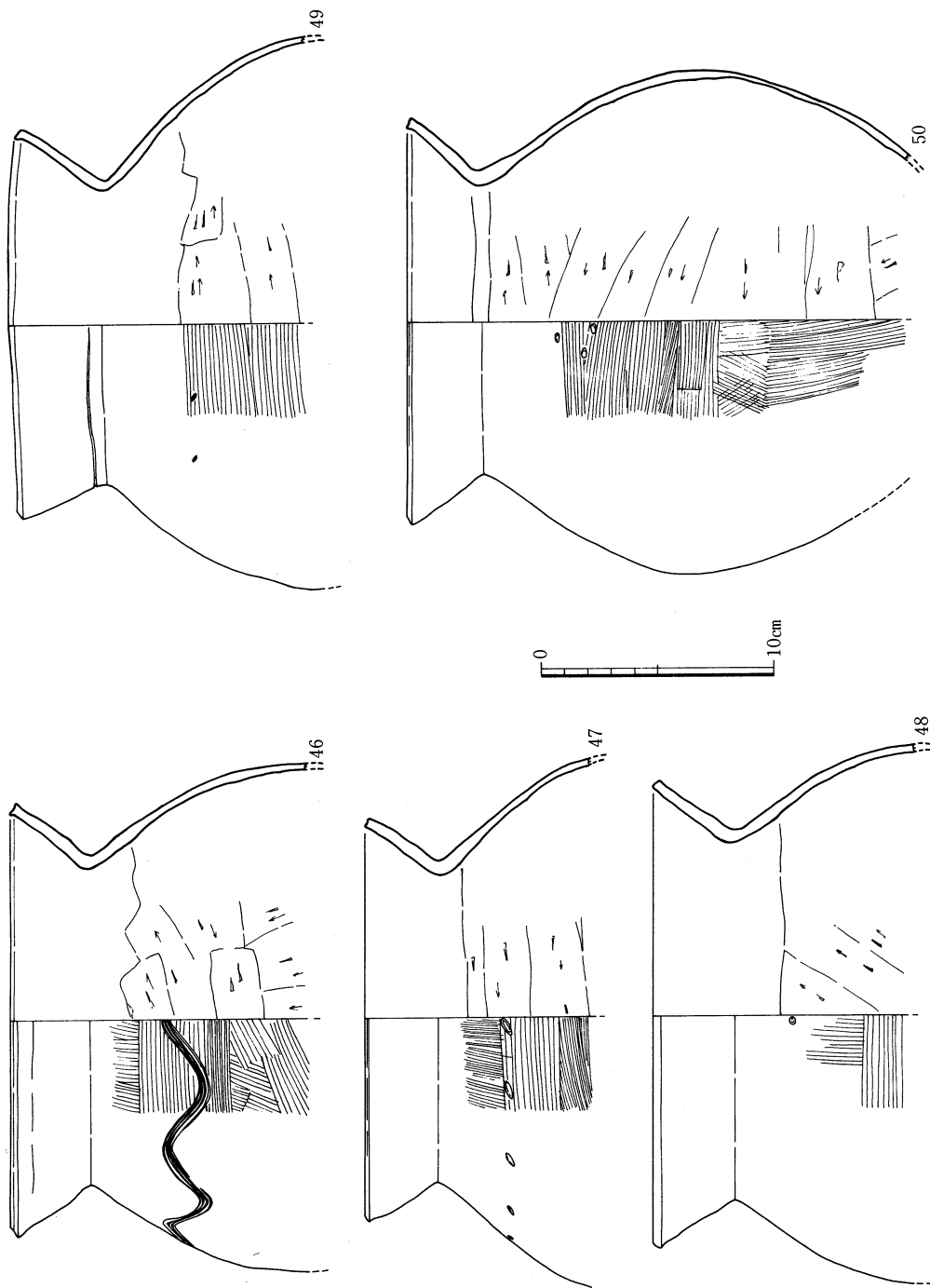


41

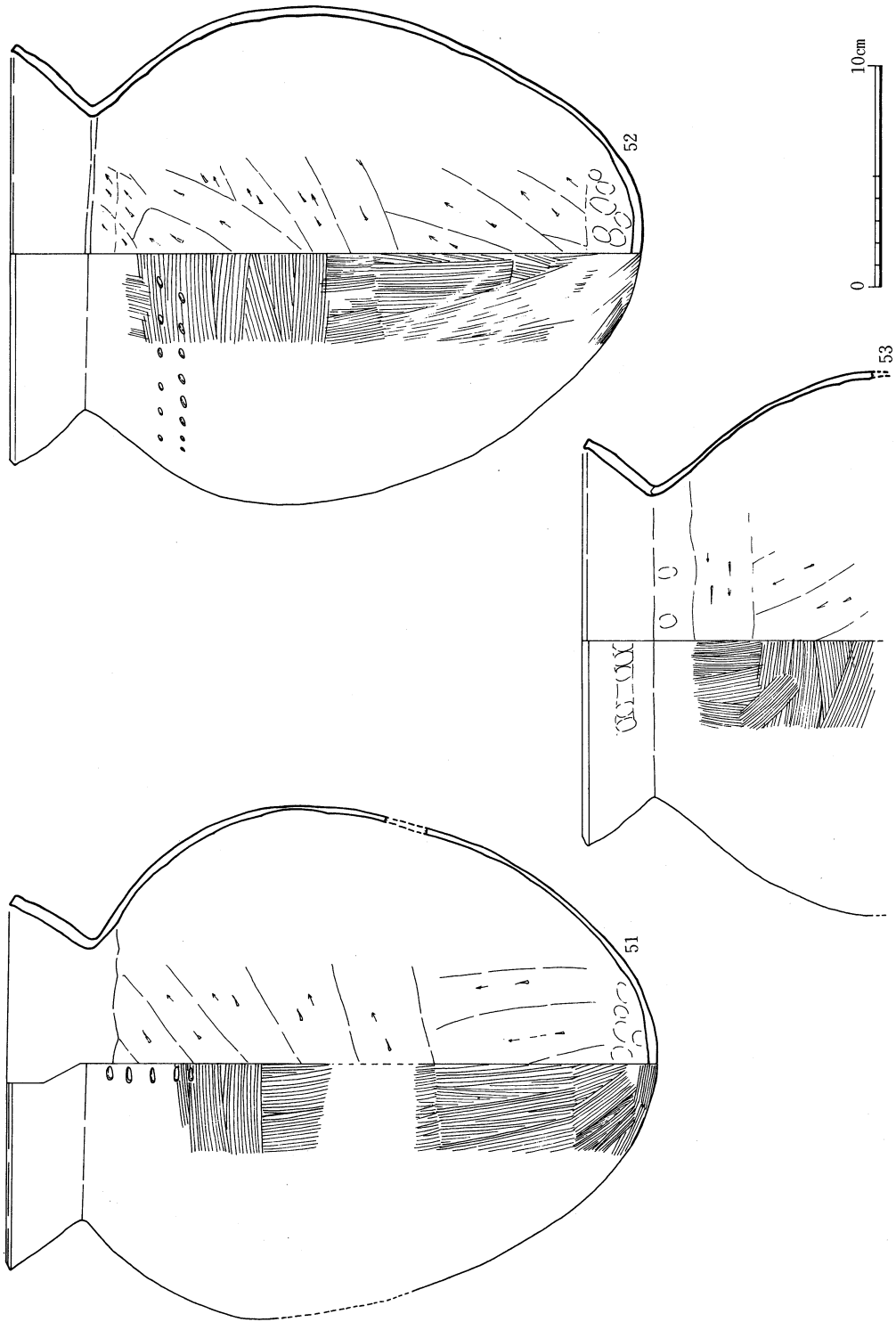
第19图 SD08出土土器实测图 (1/3)



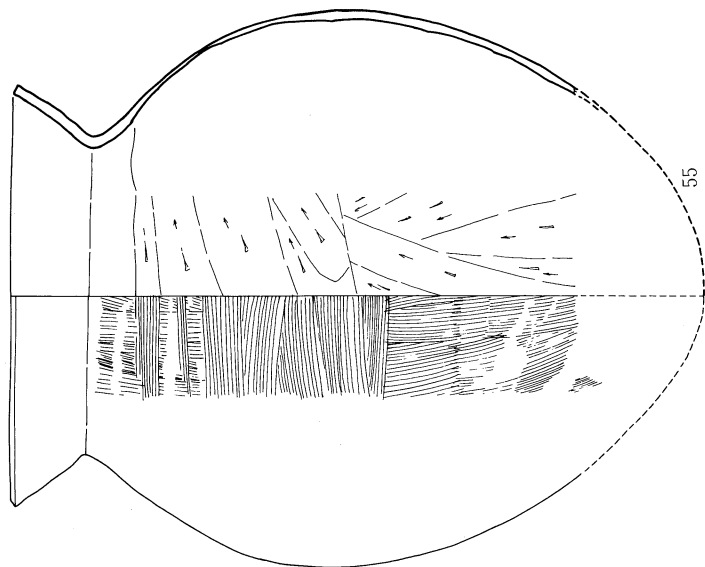
第20图 SD08出土土器美测图 (6 : 1/3)



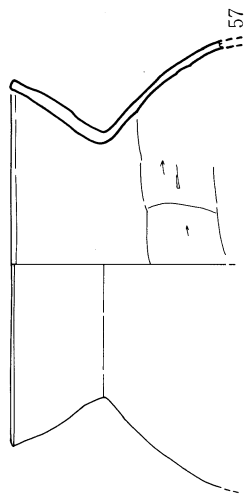
第21图 SD08出土土器实测图 (1/3)



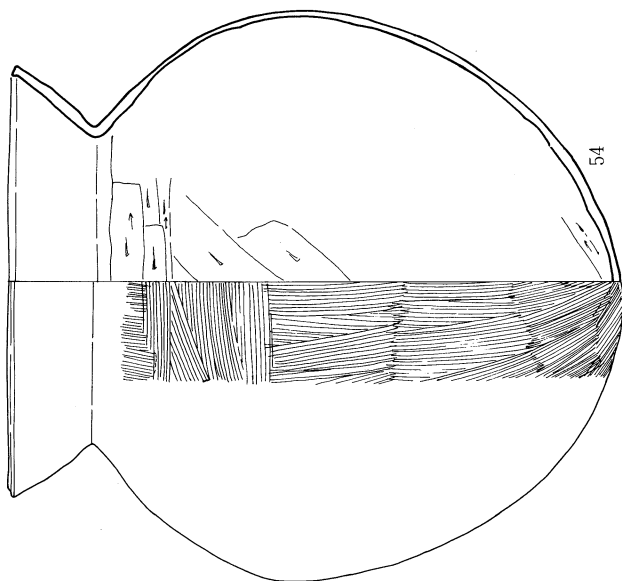
第22图 SD08出土土器实测图 (1/3)



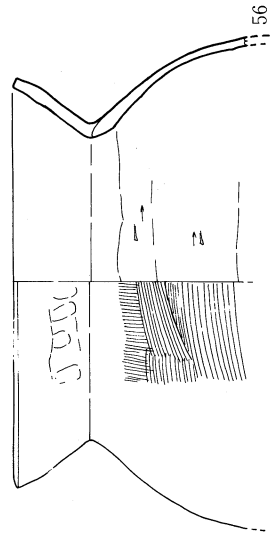
55



57

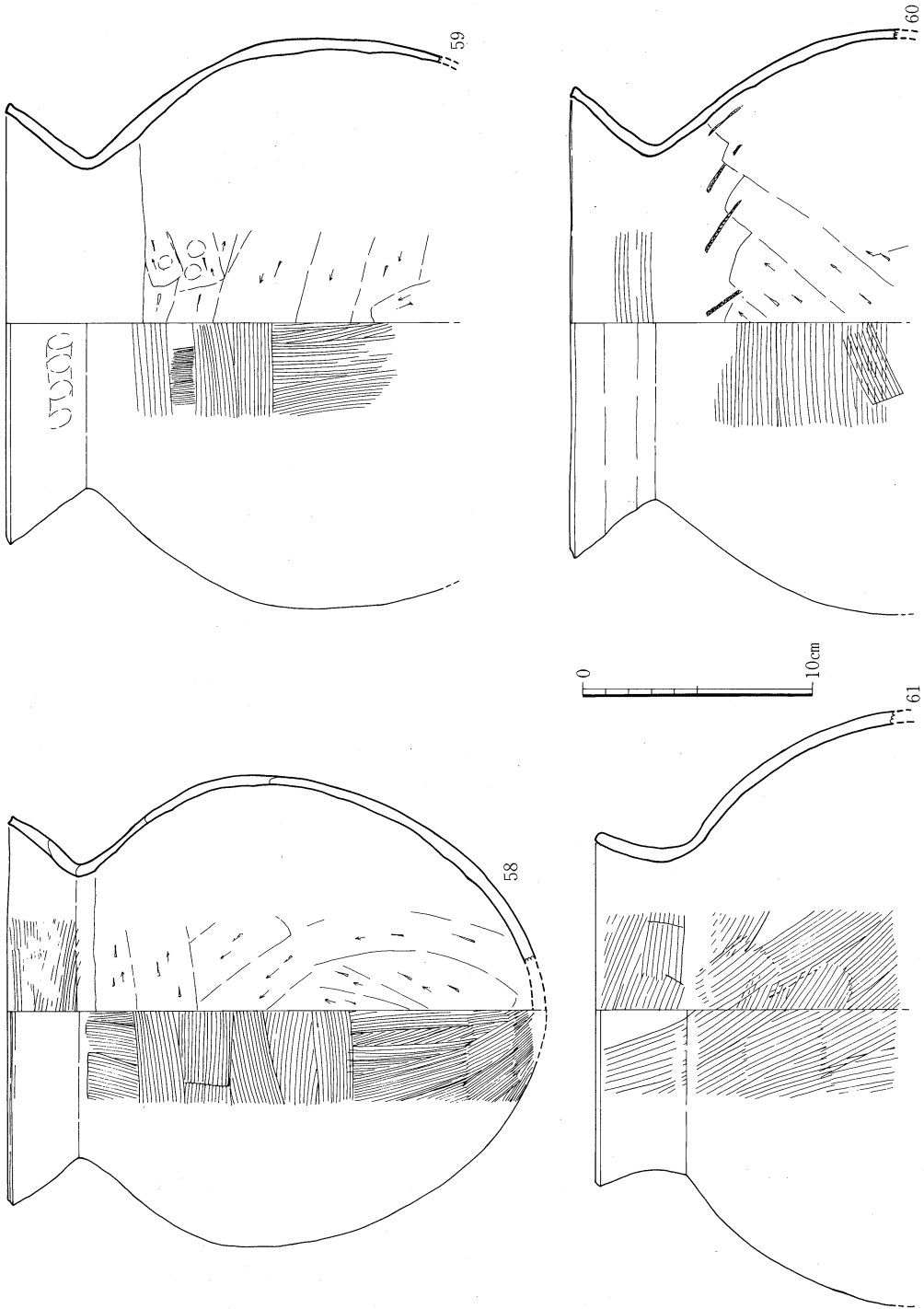


54



56

第23图 SD08出土器实测图 (1/3)



第24图 SD08出土土器实测图 (1/3)

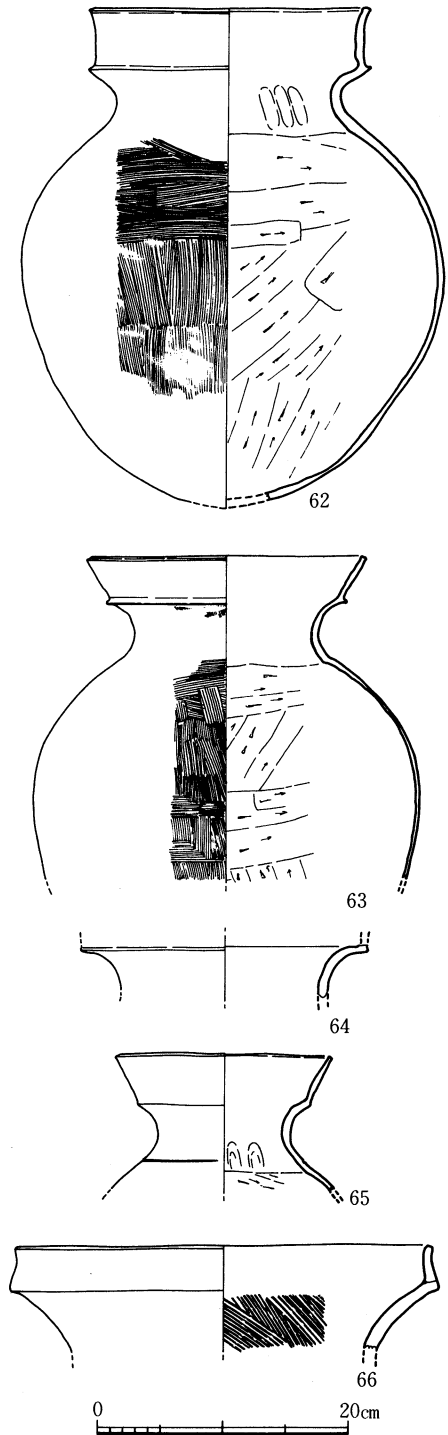
にスス、43・44の内底部にオコゲをみる。46は肩部に櫛歯状工具による波状沈線文を、47は5ヶ所の刺突文を、48は1ヶ所の刺突文を、49は口頸部外面に全周していない沈線文と肩部2ヶ所にハケ状工具による刺突文を、50は3個が1ヶ所にまとまった刺突文をみる。46～48・50は胴部外面にススをみる。51は肩部にタテに5個の刺突文を、52は上下2段に14個の刺突文をみる。51に胴部外面にススをみる。53～59には沈線・刺突文はなく、肩部から胴部上半にヨコハケをみるのみで、53・55・56・58・59は胴部外面にススをみる。58に内底部にオコゲをみる。60は肩部内面にハケ状工具による刺突文が5ヶ所現存している。61は口頸部がわずかに外反して立上がり、やや丸味をもった口唇部をもつ。外面のハケ目は胴部から口頸部へと施して、頸部はヨコナデでナデ消している。62～65は二重口重の大型壺で、61は直立に立上がり、63・65は外反して立上がっている。63の口唇部は凹んでおり、65の肩部は沈線のみ、その施文は左廻である。62は外面にススが付着している。66は直立した口縁部で、丸味のある口唇部で、荒いハケ目を内面にみる。口縁部長約15cmからの復元である。

西側排水路出土土器

67は半形品で、68は坏部外面にヨコナデ、内面にはハケ目後ナデをみ、脚部外面には一部指頭圧痕をみ、その後ミガキを施している。円孔は脚部にない。

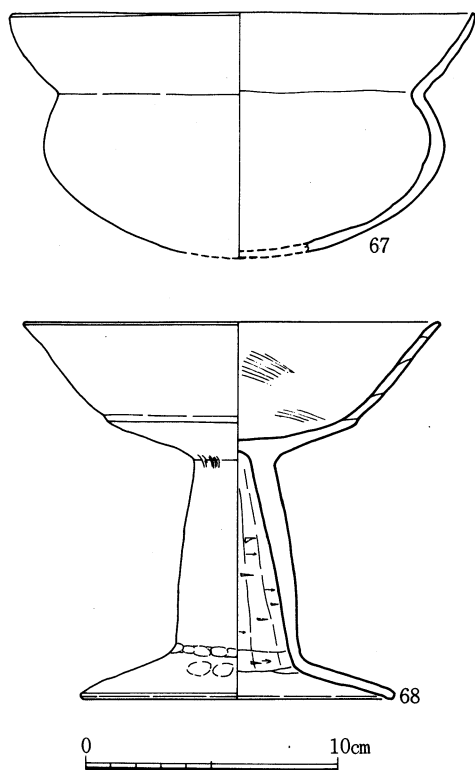
第3区排水路等出土土器

69・70はSD07出土であるが、SD07に伴うものではない。71～75は排水路出土であり、摩滅が著しく、SD06・SD07の時期以前は洪水によ

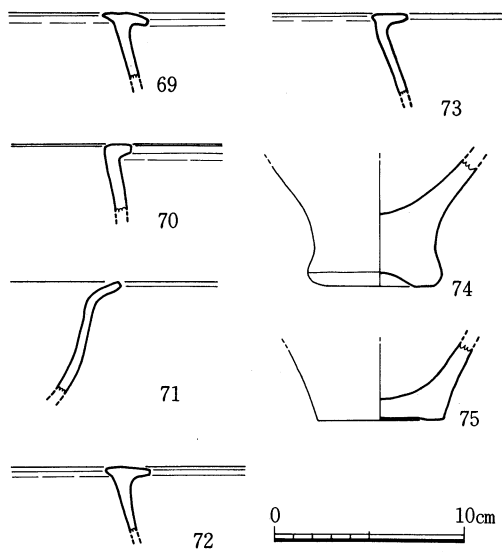


第25図 SD08出土土器実測図 (1/6)

り流れたものと考える。



第26図 第3区西側排水路出土土器実測図 (1/3)



第27図 第3区排水路等出土土器 (1/4)

IV まとめ

今回の調査では古墳時代から中世にかけての遺構を検出したが、このうち第1区の不明遺構についてまとめてむすびとしたい。

第1区の不明遺構は平面プランが長方形を呈し、その規模3×4.5m・深さは10cm弱をはかる浅い土壌で、底面はほぼフラットである。埋土はわずかに粘性を含む黒灰色砂質土、底面は黒灰色粘質土である。遺構は古墳時代前期より古い黒灰色粘質土を切った状況で検出されており、底面から布留期の壺片が出土している。したがって、古墳時代前期の資料と考えられる。

この遺構は低湿地帯に位置し、碁盤の目状に並んで検出されている。また、当調査区西側壁面では古墳時代前期と平安期に営まれたと思われる水田・畦畔・水路跡の土層が観察されていることから、水田もしくは何らかの耕作地を示す遺構の可能性があると考えられる。

しかし、遺構間にみられる畦畔と思われるベルトは、各地で検出されている古墳時代の畦畔と比べると幅が約1.2mもあり畦畔としてはあまりにも幅広すぎるとされる。そして、畦畔と同じく水田遺構に不可欠とされる水路を検出していない。さらに、プラント・オパール分析をも怠っているためこの遺構を水田遺構と断言するには不備な状況にあり、今後の周辺地区での調査に期待するところが多い。

以上、第1区の不明遺構についてまとめてみたが、その詳細な部分まで解明するまでの十分な調査を実施できたとは言いがたい。ただし、当遺跡から東方約1.5kmに位置する池田遺跡^{注①}からも古墳時代前期の水田遺構の可能性があるとされる遺構が検出されている。糸島平野の低湿地帯を解明する意味で、池田遺跡も低湿地帯に位置するため当遺跡との関連性について考慮する必要がある。別稿において詳述したい。

参考文献

注(1)、角 浩行編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査概報』(前原町文化財調査報告書第37集・1991)

No	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎 土	色 調	焼 成	特 長
第 1 区 S D 01 出 土 土 器								
1	壺	18.7	31.25		砂粒を含む	(外)黄白色 (内)黒灰色	やや軟質	外反する二重口縁
2	甕	20.45	28.35		砂粒有り	黄茶色	良好	肩部に横ハケ
第 1 区 S D 02 出 土 土 器								
3	〃	17.2	26.9		砂粒を含む	(外)橙灰色 及至灰茶色 (内)同上	良好	肩部に6ヶ所の刺突文 で全周していない。
4	壺	14.2			砂粒をわずかに 含む	灰白色	非常に良好	非常に丁寧な仕上り
第 1 区 S D 03 出 土 土 器								
5	高坏	14.35	5.8		砂粒なし	淡赤茶色	良好	
6	〃			12.35	砂粒含まず良好	灰茶色	良好	
7	壺				砂粒あり	灰黄色	良好	

第 2 表 第 1 調査区計測等一覧表

No	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎 土	色 調	焼 成	特 長
第 3 区 S D 06 出 土 土 器								
1	壺	13.5	18.7	16.4	砂粒を含まない	灰茶色	良好	肩部に沈線
2	〃	12.3	15.8		砂粒少なく良好	黄灰色	良好	肩部に横ハケ
3	鼓形 器台	16.3	9.1		砂粒を含まずわずかに金雲母を含む	灰黄色	良好	坏部内面横ハケ・脚部内面ハラ削り
4	甕	17.3	26.9		砂粒をわずかに含む	(外)淡赤茶色 及至灰黄色 (内)同上	ややあまい	肩部にハケ状工具原体の刺突文6ヶ所現存
5	〃	18.0	25.2	砂粒等を含む	(外)灰色 (内)赤茶色	良好	肩部に列点の刺突文4ヶ所	
6	〃			砂粒を含む	(外)灰黒色 (内)同上	非常に良好	肩部に横ハケ後、斜目ハケ	
7	壺	44.6		砂粒を含むが良好	(外)茶灰色 (内)同上	良好	大型品で、口縁部直口・肩部に台形状凸帯	
第 3 区 S D 07 出 土 土 器								
8	〃	13.0	12.5	15.15	砂粒あまりなく良好	淡赤灰色	普通	肩部に沈線・列点の刺突文3ヶ所
9	〃	11.5	14.6		砂粒なく良好	灰黄色	良好	肩部に波状沈線
10	〃	11.8			同上	(外)灰白色 (内)淡灰白色	非常に良好	非常に丁寧な仕上り
11	〃	12.4			微砂粒を含むが良好	(外)灰茶色 (内)濃赤茶色	良好	胴部に3帯の横ハケ
12	〃	13.9			砂粒等を含む	灰白色	良好	肩部に横ハケ
13	〃				砂粒をわずかに含む	(外)灰茶色 (内)同上	良好	
14	〃	12.4	15.0		砂粒を含む	灰白色	普通	二重口縁
15	鼓形 器台	17.9	8.5		砂粒なく良好	(外)茶黒色 (内)黄灰色	良好	坏部内面ヘラミガキ・脚部内面ヘラケズリ
16	椀	11.25			砂粒を含む	黄灰色	ややあまい	内外面ナデ
17	罎	10.9	8.7		同上	(外)灰色 (内)黄灰色	良好	
18	〃	11.6			砂粒なし	灰白色	大変良好	
19	〃	10.1	6.05		同上	灰白色	良好	外面ヘラミガキ
20	直口 壺	12.3			砂粒を含まず良好	黄灰色	良好	胴部内面ナデ
21	鉢	8.6			砂粒なし	黄茶色	非常にあまい	内外面丹塗り
22	〃	16.8	7.3		砂粒をわずかに含む	灰茶色	非常にあまい	口頸部ヨコナデ

第 3 表 第 3 調査区計測等一覧表

No	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎 土	色 調	焼 成	特 長
23	鉢	18.7	10.0		砂粒等を含む	(外)赤茶色 (内)淡赤茶色	普通	肩部に横ハケ
24	鉢				砂粒をわずかに含む	(外)灰黒色 及至黒灰色 (内)灰白色	良好	口縁下部に指頭痕・内面ハケ目
25	高坏	17.4			砂粒等をわずかに含む	(外)淡赤茶色 及至赤黄色 (内)茶黄色	非常に良好	
26	◇			11.6	砂粒をわずかに含む	(外)淡赤茶色 (内)灰白色	良好	脚部に円形の透孔2ヶ所
27	◇			11.3	砂粒を含む	黄灰色及 至茶灰色	良好	脚部に円形の透孔3ヶ所
28	◇			13.45	同上	灰白色	良好	
29	◇			10.7	わずかに微砂粒を含むが良好	淡赤茶色 脚内面～ 灰白色	非常に良好	脚部に円形の透孔3ヶ所
30	◇	20.9	15.7	13.1	砂粒なく良好	淡茶灰色	良好	同上
31	◇	21.5	15.55	13.15	砂粒あまり含まず良好	灰白色	良好	同上
32	◇	20.6	16.8	13.95	砂粒含まず良好	灰白色	良好	同上
33	◇	21.4	15.3	13.2	砂粒をわずかに含むが良好 金雲母有り	茶灰色	良好	同上
34	◇	17.8			砂粒なく良好	(外)灰白色 及濁赤茶色 (内)灰白色	良好	
35	◇	20.05			同上	(外)灰色 (内)淡黄灰色	良好	
36	甕	17.5	26.5		砂粒等を含む	(外)灰茶色 及至灰白色 (内)灰白色	良好	肩部に波状沈線
37	◇	17.65	30.3		砂粒等をわずかに含む	内外～ 淡赤茶色	良好	同上
38	◇	19.0	27.5		砂粒等を含む	灰茶色	良好	同上
39	◇	18.4	28.3		砂粒を含む	(外)灰白色 (内)灰茶色 及至淡赤茶色	普通	同上
40	◇	18.7			砂粒等を含む	(外)茶灰色 (内)灰茶色	良好	同上
41	◇	19.6	32.3		砂粒あまりなく良好	(外)黄茶色 (内)淡茶色	良好	同上
42	◇	21.4	32.9		砂粒を含む	(外)灰茶色 (内)灰白色	良好	肩部に横走する沈線

第4表 第3調査区計測等一覧表

No	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎 土	色 調	焼 成	特 長
43	甕	15.85	21.2		砂粒・雲母を含む	淡灰茶色	良好	肩部に4条の沈線
44	〳	19.2	31.0		砂粒を含む	(外) 茶黄色 (内) 灰茶色	良好	肩部に沈線
45	〳	17.15			砂粒含まず良好	(外) 灰茶色 及至灰黄色 (内) 灰茶色	良好	同上
46	〳	18.7			砂粒を含む	灰白色	良好	肩部に波状櫛歯文
47	〳	17.35			砂粒含まず良好	(外) 黄茶色 (内) 赤茶色	あまい	肩部に刺突文 5ヶ所のみ
48	〳	20.1			砂粒を含む	淡茶色	良好	肩部に刺突文1個現存
49	〳	16.8			砂粒をわずかに含む	(外) 灰白色 (内) 同上	良好	肩部にハケ状工具原体の刺突文2ヶ所
50	〳	17.5			砂粒有り	(外) 淡茶色 (内) 淡赤茶色	良好	肩部に3個の刺突文
51	〳	16.8	29.05		砂粒等あまり含まず 良好	(外) 赤茶色 (内) 灰茶色	良好	肩部に5個の刺突文で縦に並んでいる。
52	〳	19.0	28.25		砂粒を含む	(外) 灰白色 及至灰茶色 (内) 黒茶色	良好	肩部に刺突文、上段6個・下段8個で全周せず
53	〳	18.3			砂粒を含まず良好	(外) 灰茶色 (内) 同上	良好	肩部横ハケ
54	〳	17.3	24.55		砂粒わずか有り	(外) 灰茶色 (内) 淡黒灰色	良好	同上
55	〳	17.0			微砂粒を含む	(外) 黄茶色 (内) 赤茶色	ややあまい	同上
56	〳	16.4			砂粒有り	(外) 灰黄色 (内) 黒灰色	ややあまい	同上
57	〳	14.75			砂粒等を含む	黄茶色	非常にあまい	
58	〳	17.0			砂粒わずかに有り	(外) 茶色 (内) 同上	良好	肩部に横ハケ
59	〳	19.25			砂粒なし	(外) 灰白色 (内) 灰白色	良好	同上
60	〳	20.6			砂粒を含む	灰白色	良好	同上
61	〳	15.4			同上	(外) 濁赤茶色 (内) 同上	良好	やや外反する直口の甕
62	甕	22.4			砂粒等あまりなく良 好	(外) 灰白色 及至灰黄色 (内) 同上	良好	直口する二重口縁
63	〳	22.3			砂粒を含む	灰茶色	良好	外反する二重口縁
64	〳				砂粒等を含む	淡灰茶色	良好	

第5表 第3調査区計測等一覧表

No	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎 土	色 調	焼 成	特 長
65	壺	17.3			砂粒をわずかに含む	灰茶色	良好	外反する二重口縁 直口する口縁
66	壺?	33.3			砂粒を含む	灰茶色	普通	
67	鉢	18.45			微砂粒をわずかに含む	(外)灰茶色 (内)同上	良好	
第 3 区 西 側 排 水 路 出 土 土 器								
68	高坏	16.6	15.15	12.45	砂粒等を含む	(外) 淡明赤 茶色 (内) 灰白色及 至淡明赤茶色	普通	
69	甕				砂粒なし	淡黄茶色	良好	
第 3 区 排 水 路 等 出 土 土 器								
70	〃				砂粒有り	灰茶色	良好	
71	〃				砂粒をわずかに含む	灰茶色	良好	
72	〃				砂粒有り	灰茶色	良好	
73	〃				砂粒なし	淡赤黄色	ややあまい	
74	〃			7.1	砂粒有り	淡灰茶色	普通	
75	〃			6.7	同上	淡赤茶色	普通	

第 6 表 第 3 調査区計測等一覧表

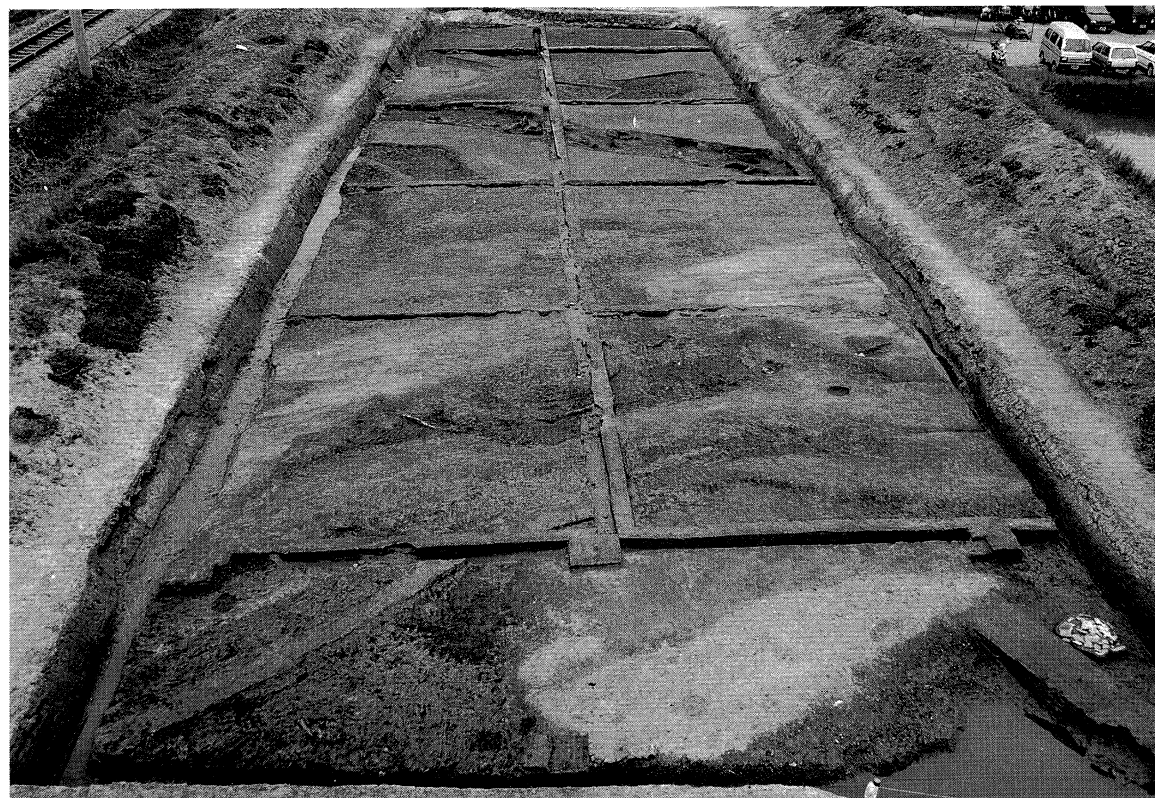
版 图



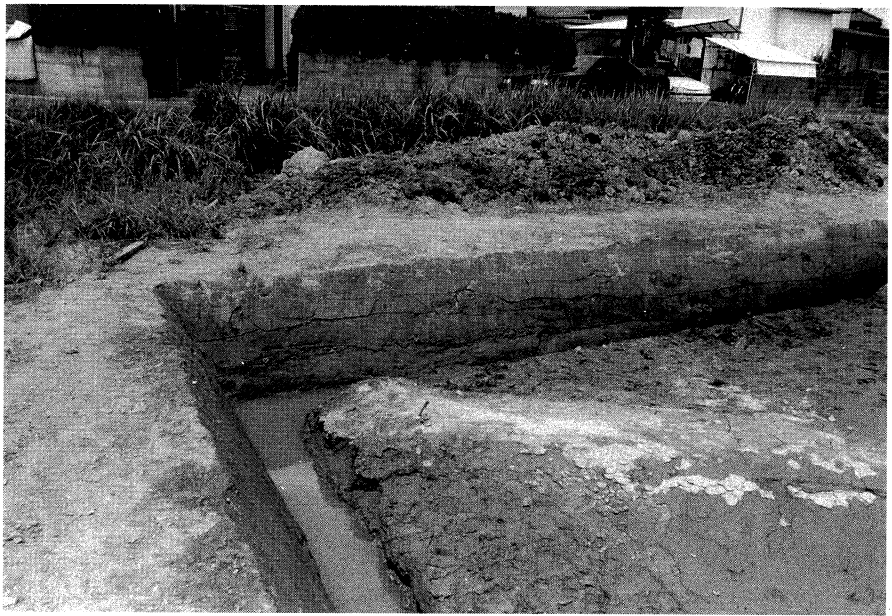
潤・壺丁田遺跡全景



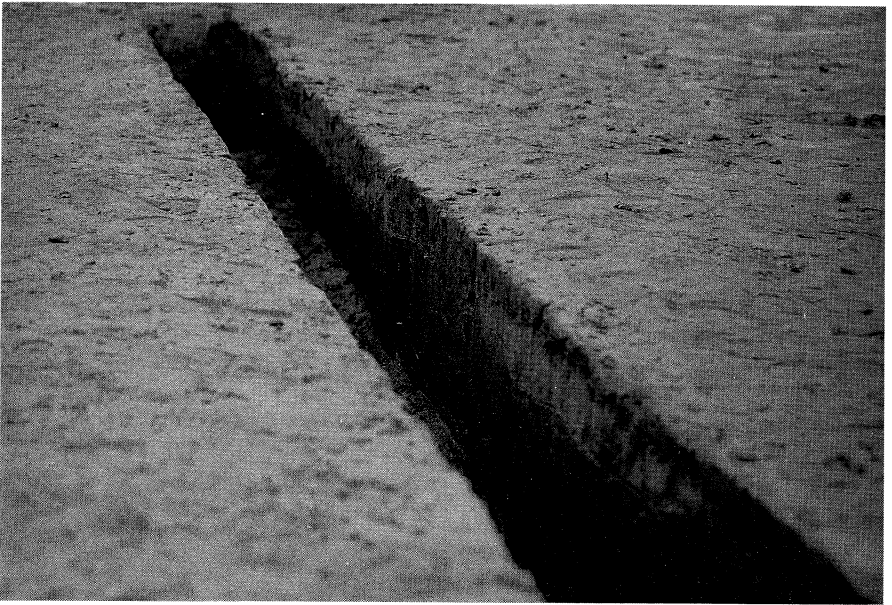
〔上〕第1区調査区全景（北から）



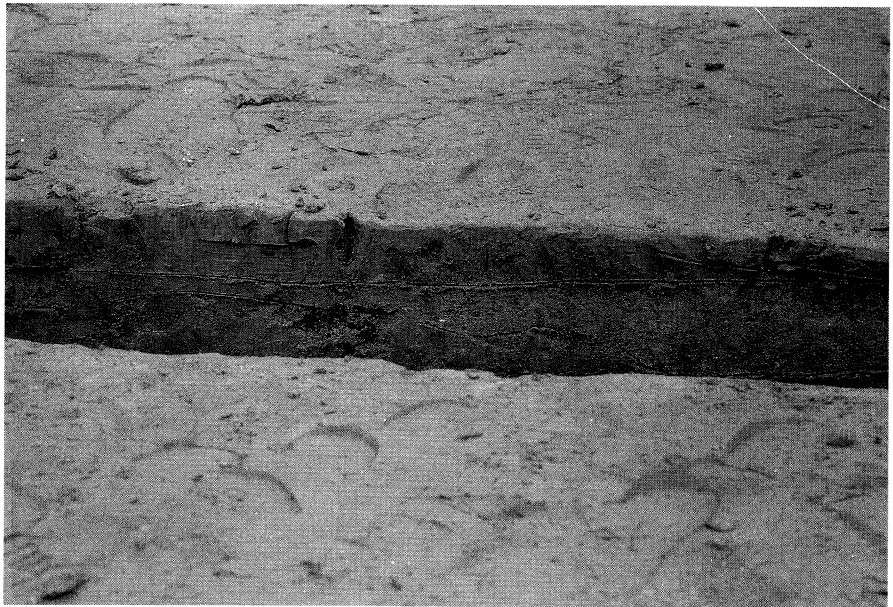
〔下〕同 上（西から）



〔上〕 第1区西壁土層図

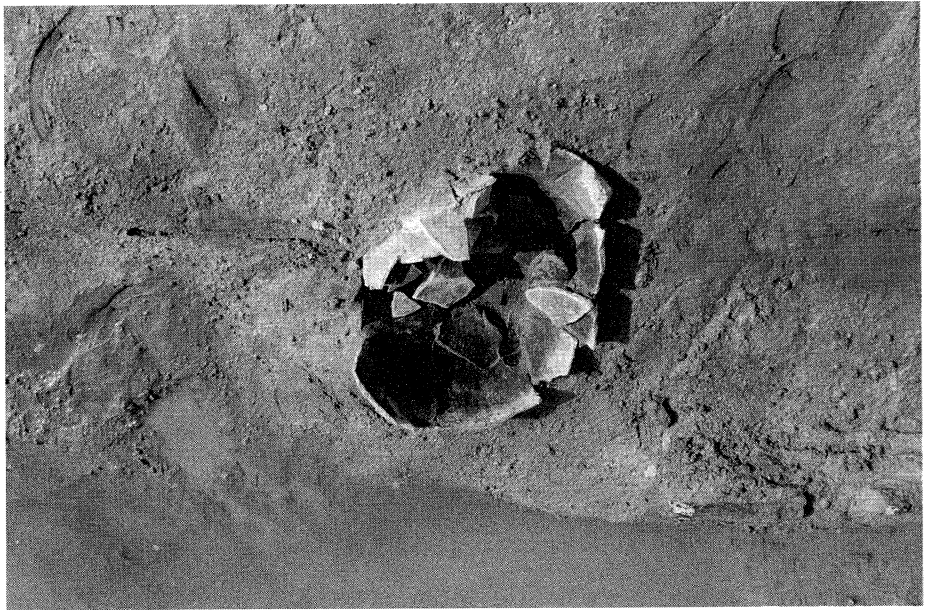


〔中〕 第1区のIb・
1d間土層図

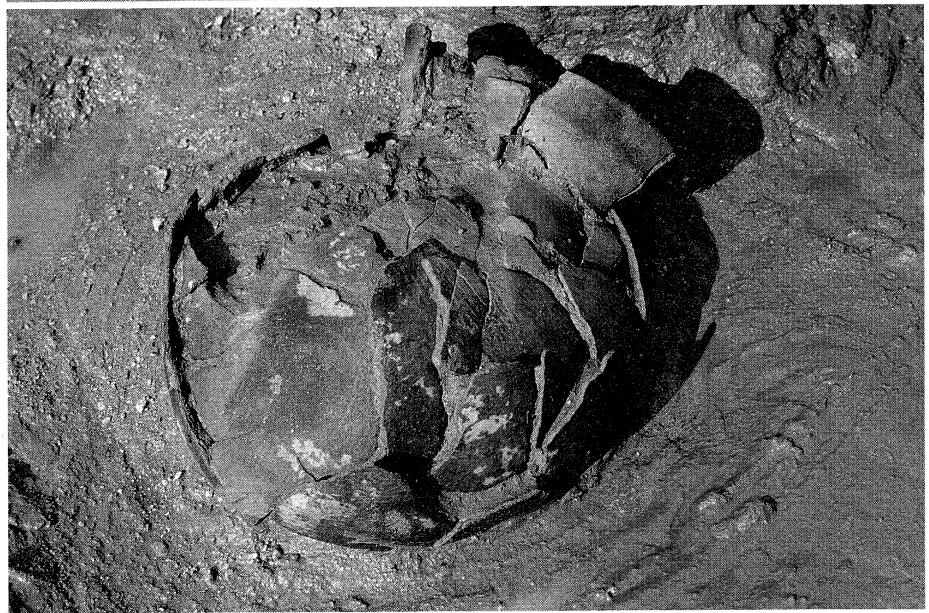


〔下〕 同

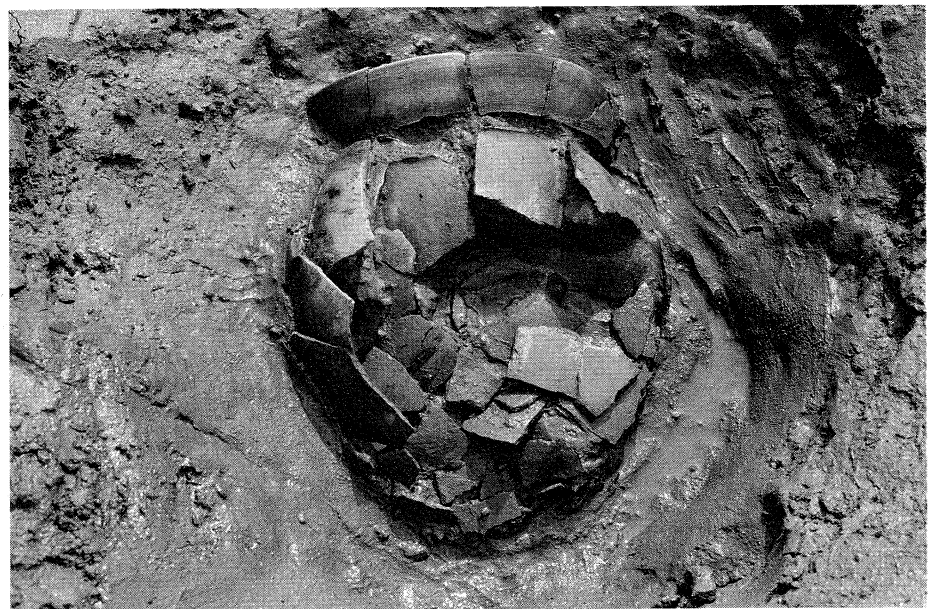
上



〔上〕 SD01土器
出土状況



〔中〕 同 上



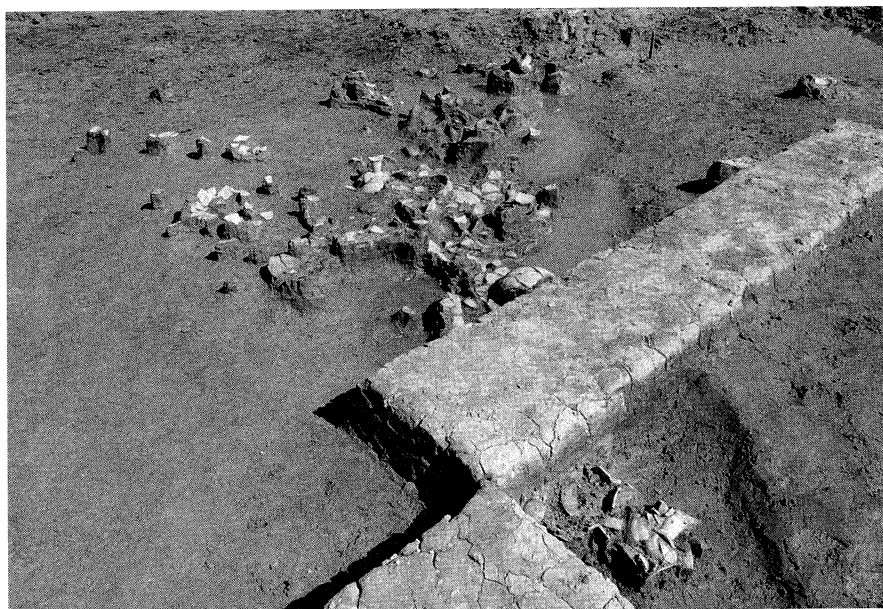
〔下〕 SD02土器
出土状況



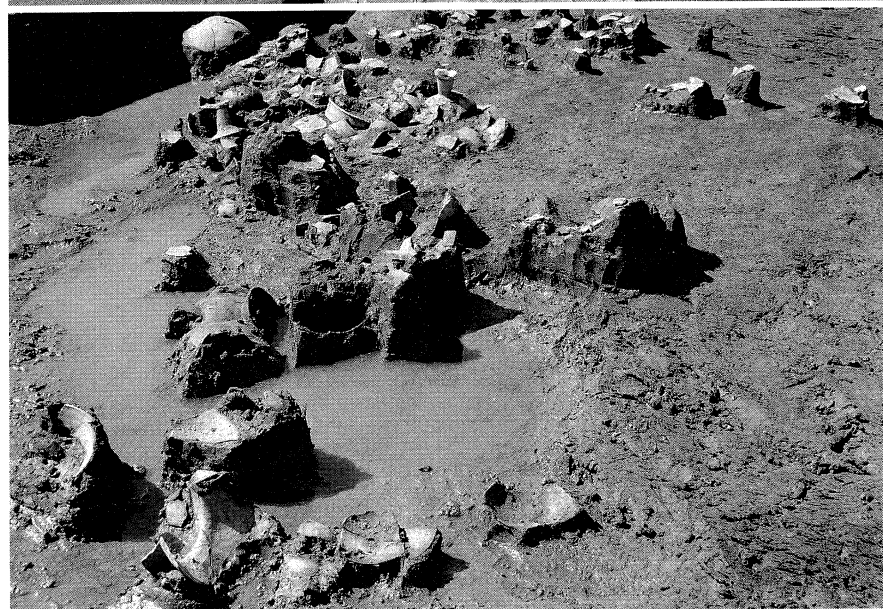
〔上〕 第3区調査区
全景（南から）



〔下〕 同上（東から）



[上] SD07土器
出土状况



[中] 同 上



[下] 同 上



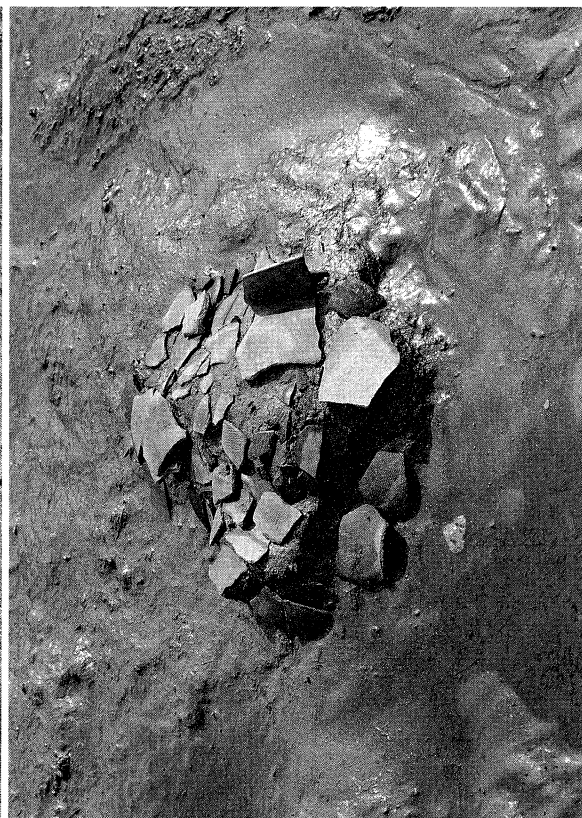
〔右上〕 SD06土器出土状況

〔右下〕 同 上



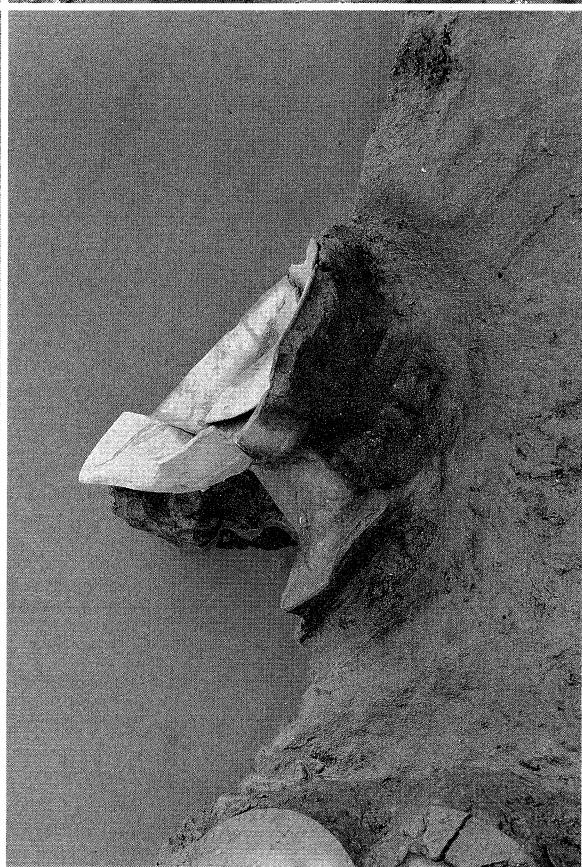
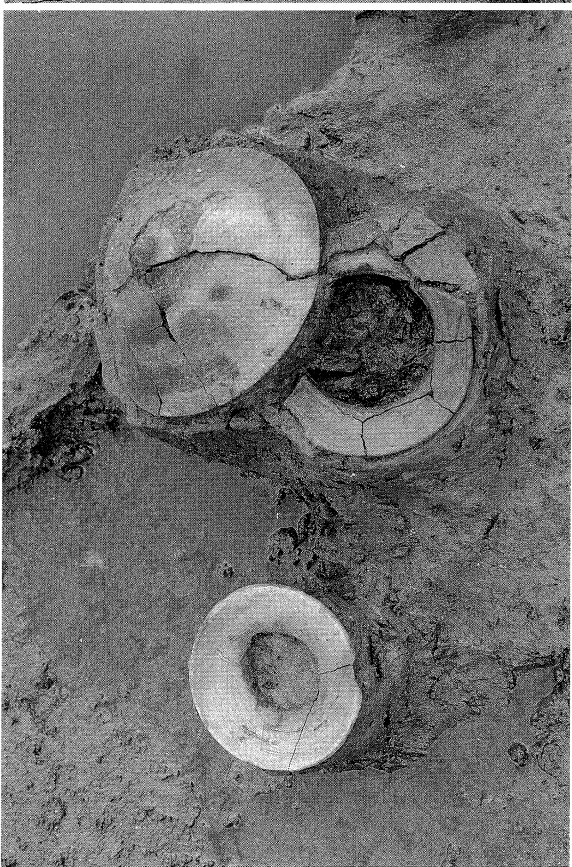
〔左上〕 SD07土器出土状況

〔左下〕 同 上



〔右上〕 SD07土器出土状況

〔左下〕 同 上



〔左上〕 SD07土器出土状況

〔左下〕 同 上



〔右上〕SD07土器出土状况

〔右下〕同上



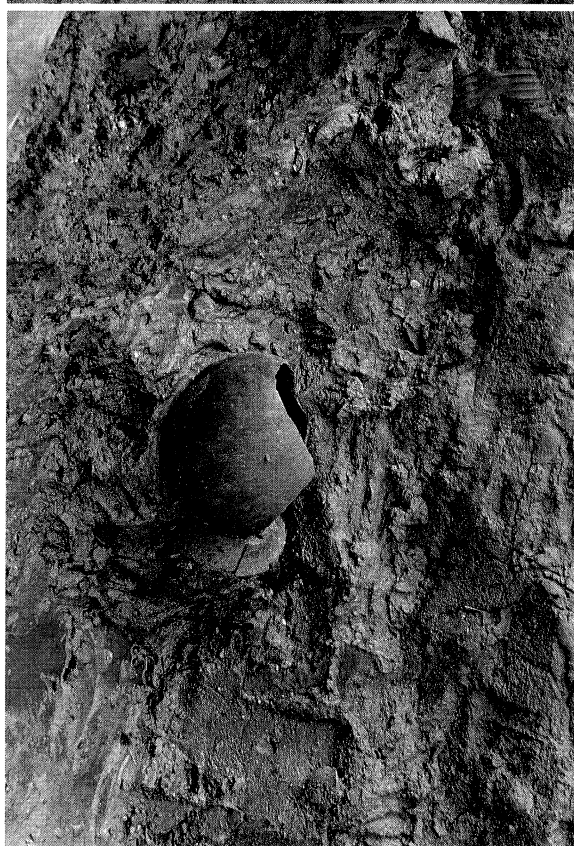
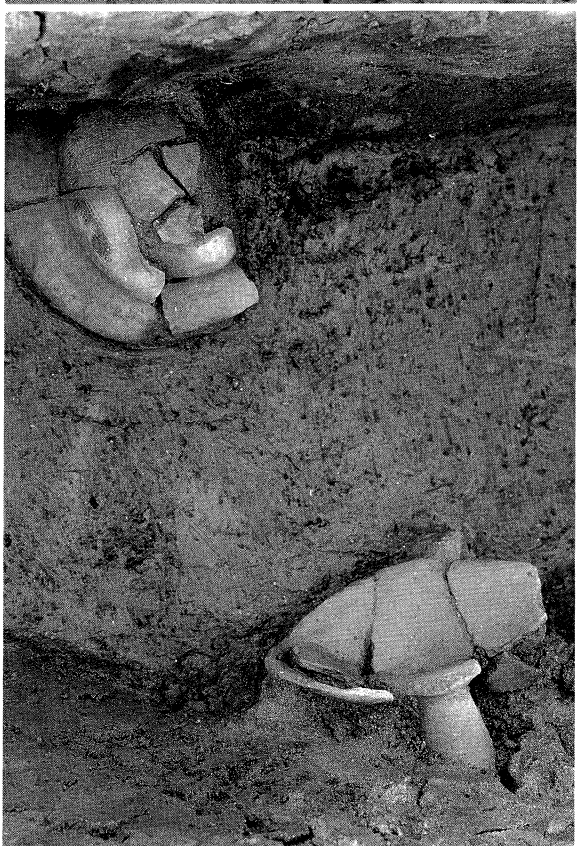
〔左上〕SD07土器出土状况

〔左下〕同上



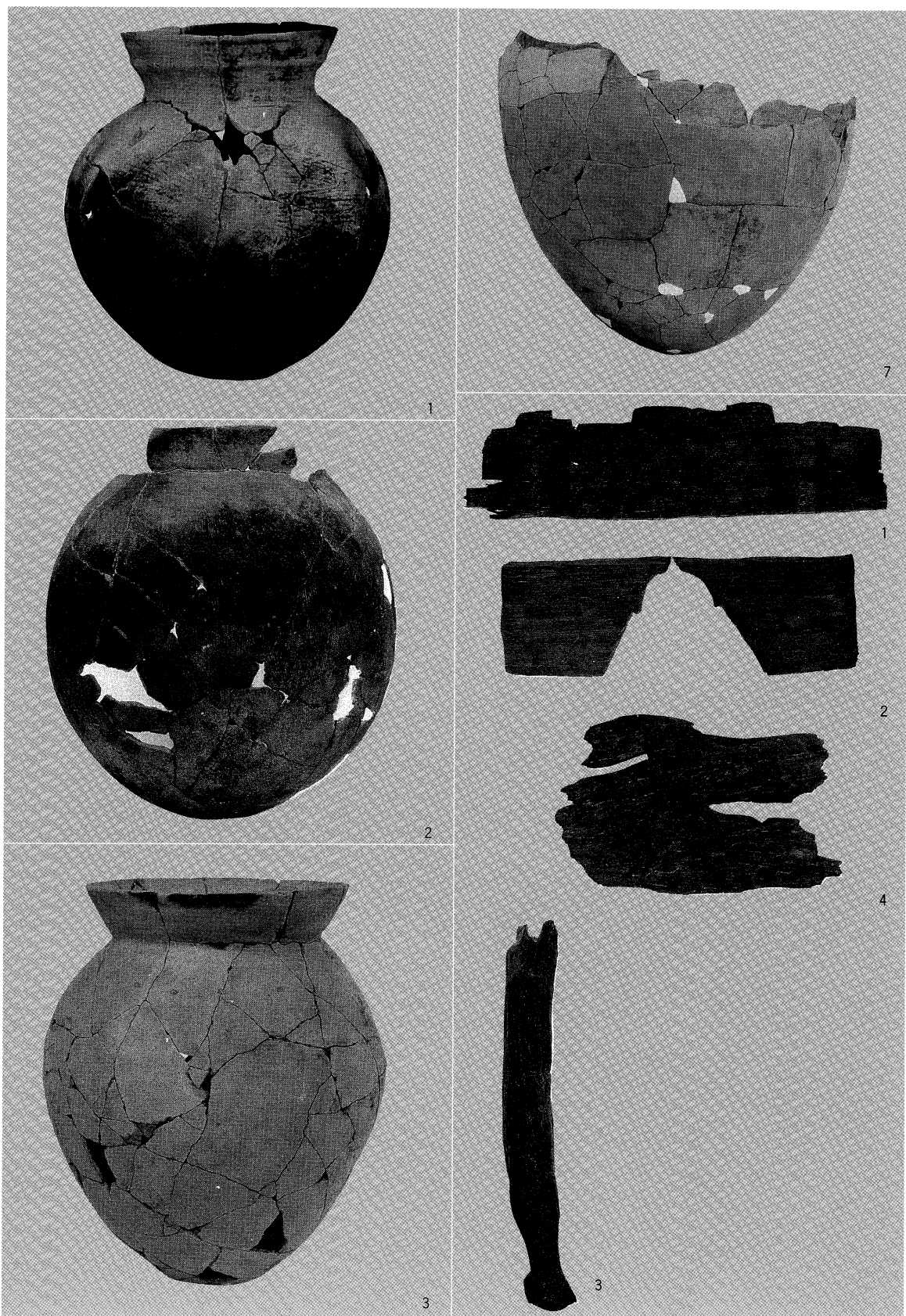
〔右上〕SD07土器出土状况

〔左下〕第3区西側排水路内出土状况

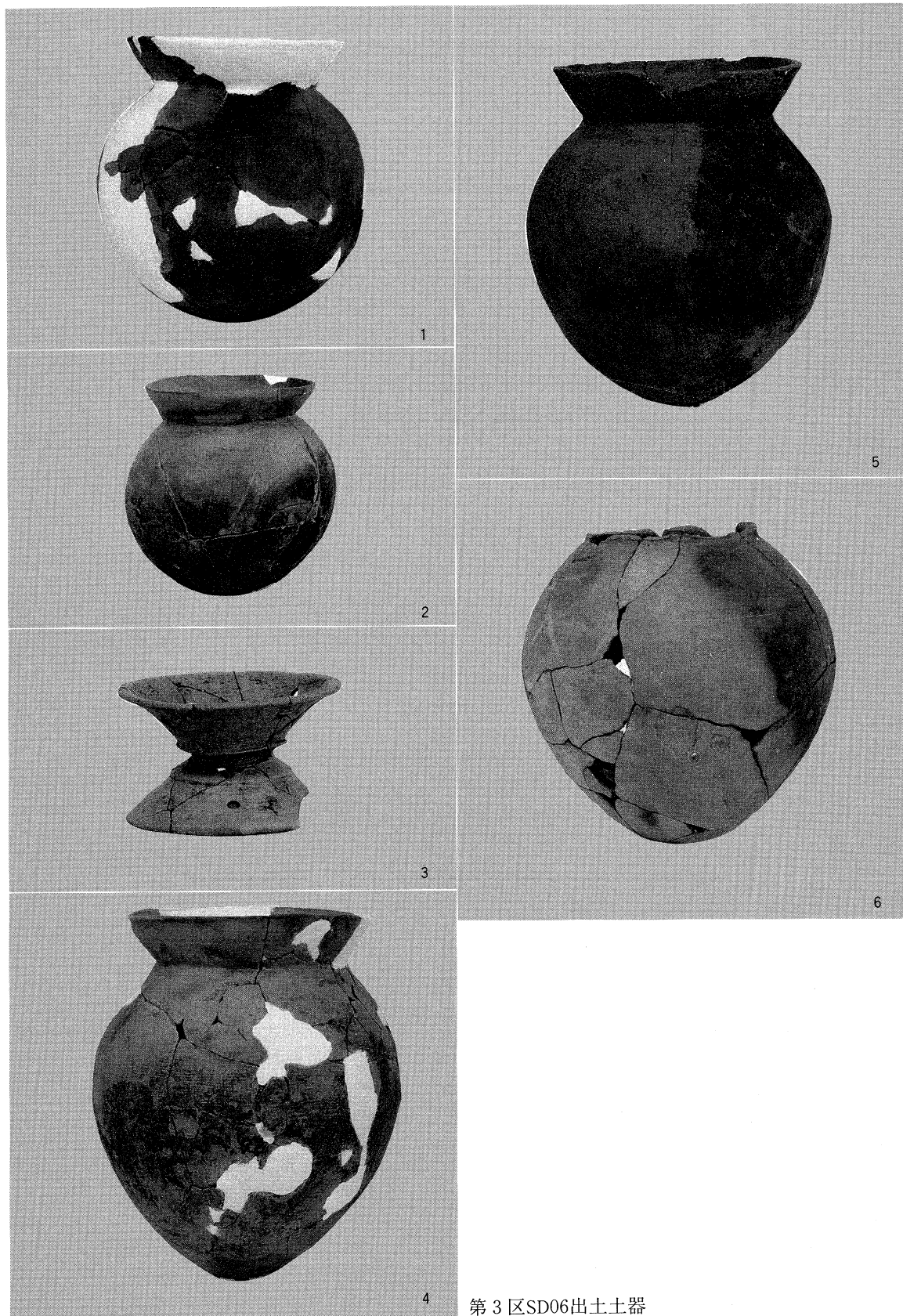


〔左上〕SD07土器出土状况

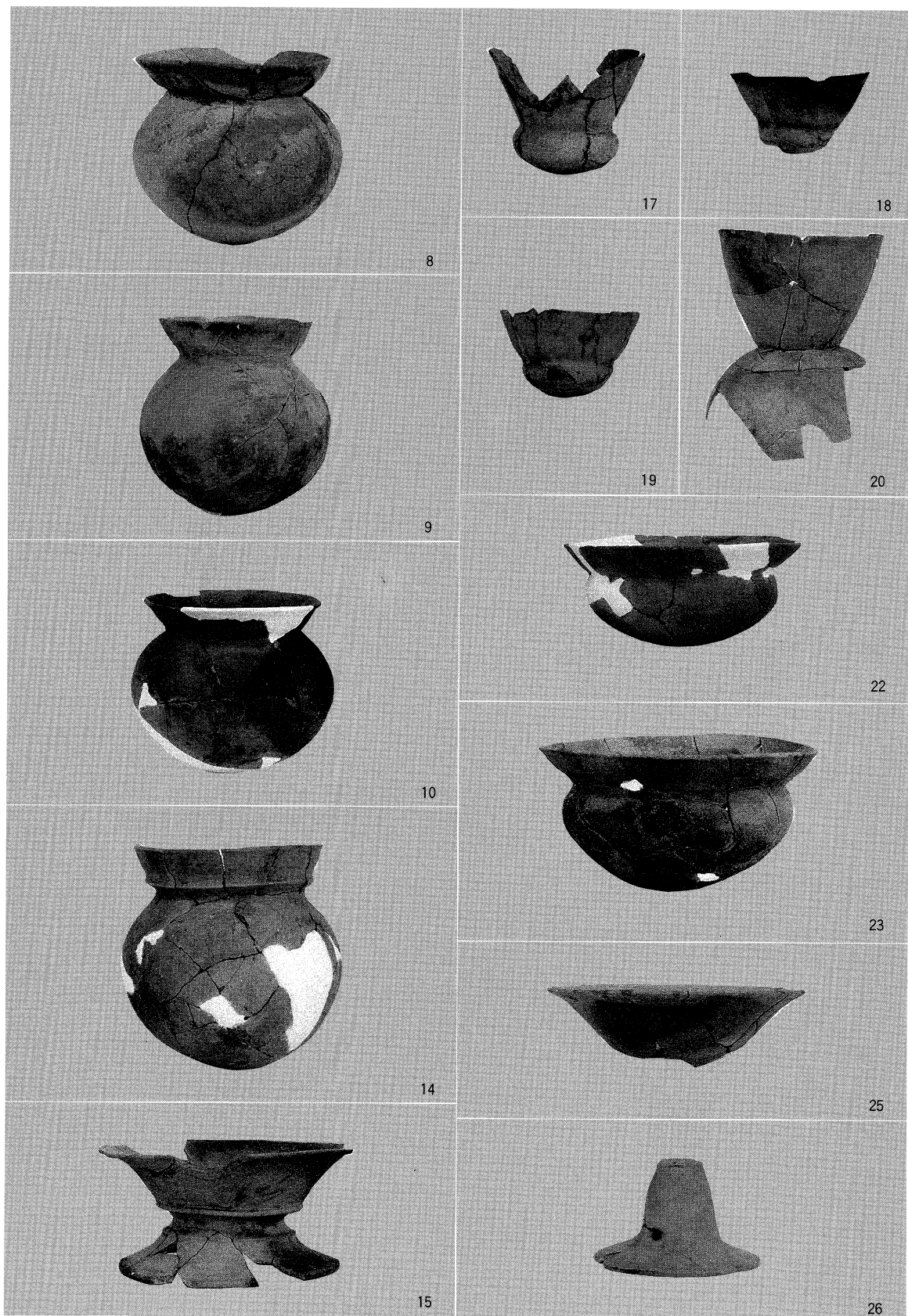
〔右上〕同



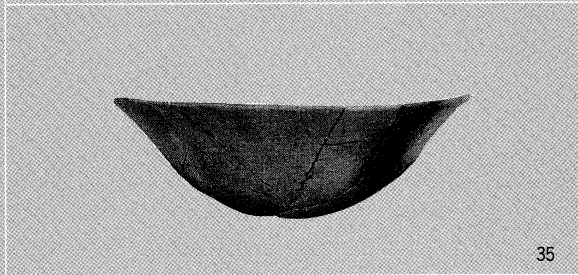
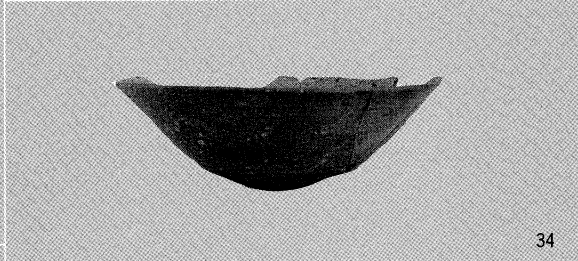
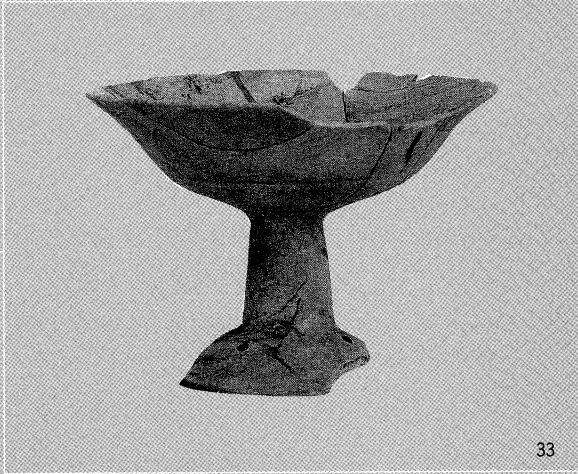
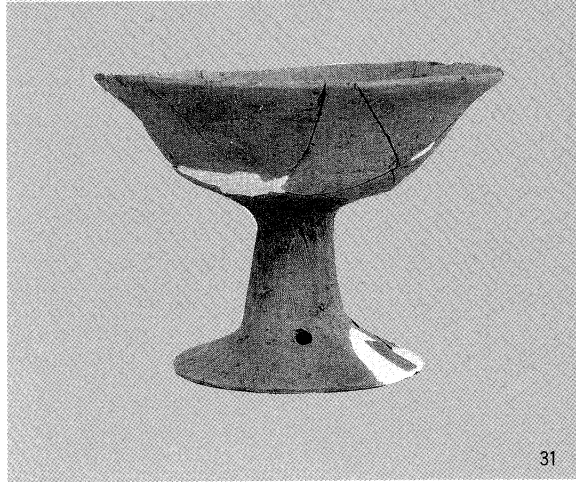
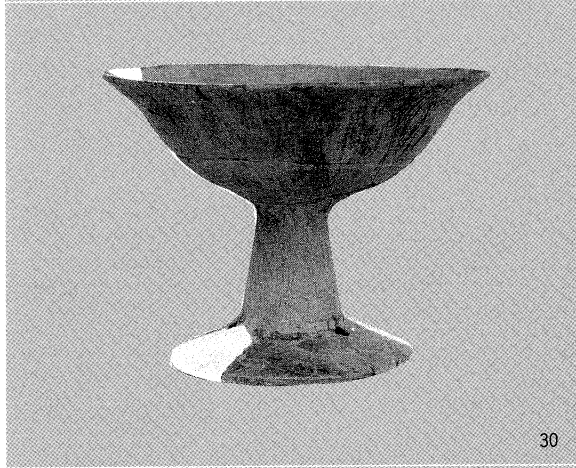
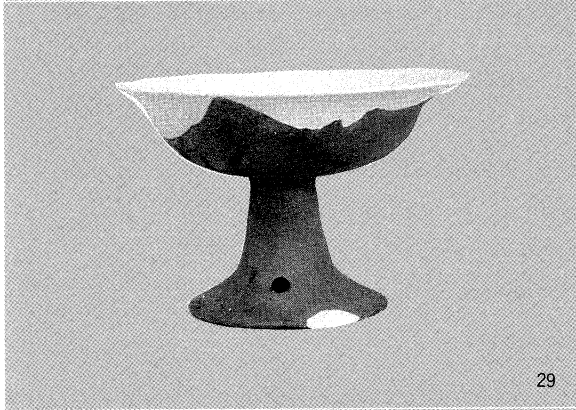
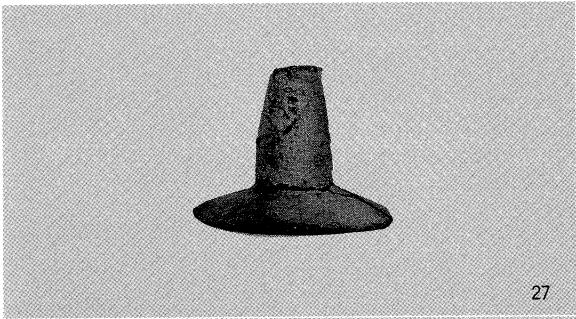
第1区SD01·SD02·SD05出土土器·木器



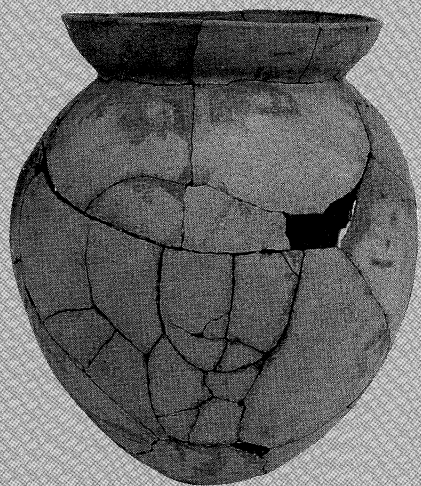
第3区SD06出土土器



第3区SD07出土土器



第3区SD07出土土器



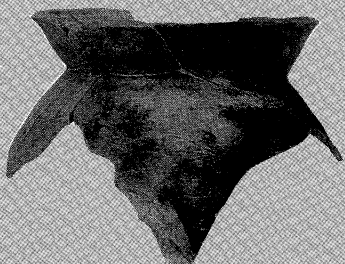
36



39



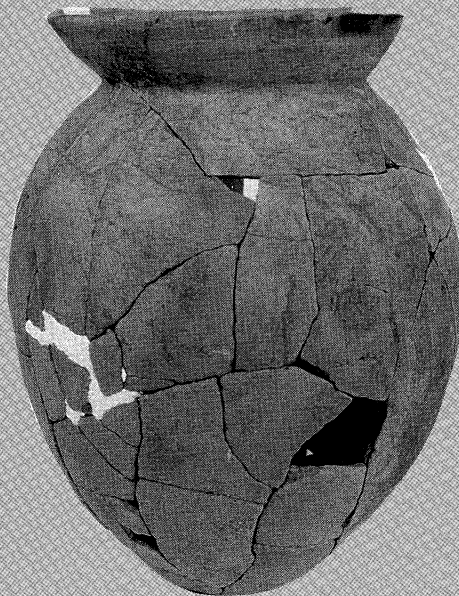
37



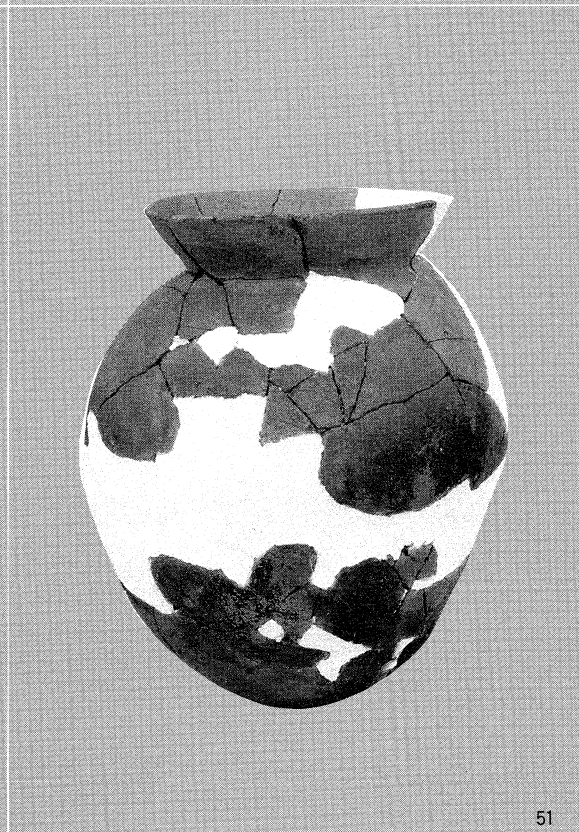
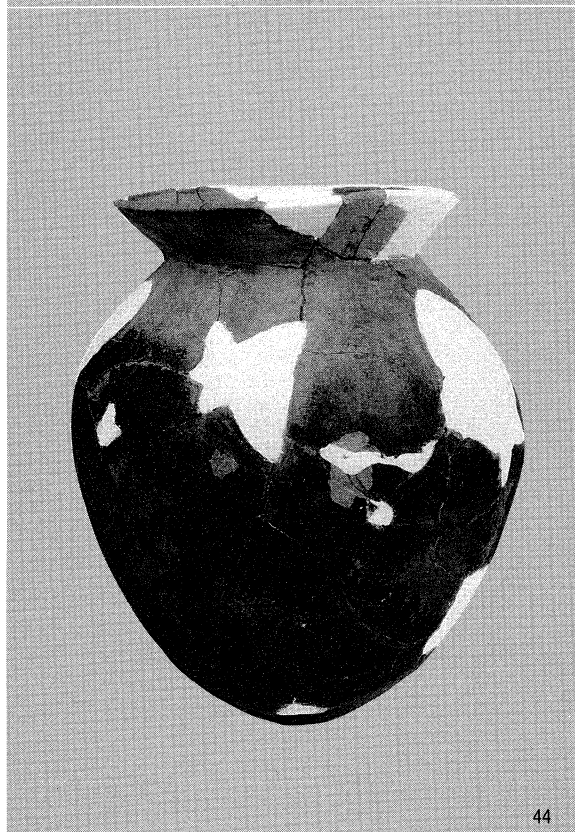
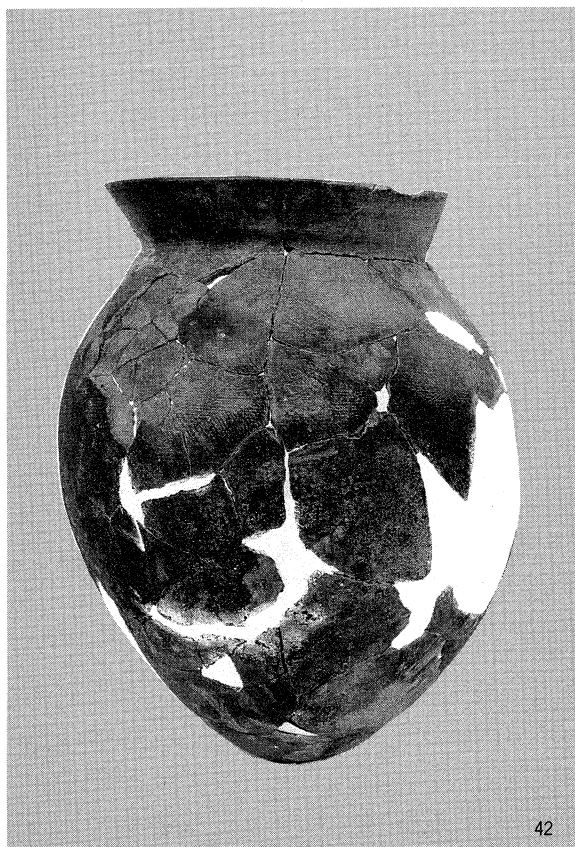
40



38



41





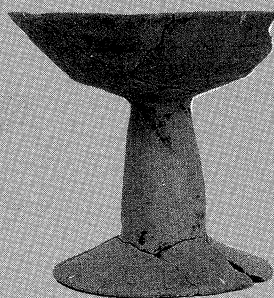
54



62



63



68

潤・老丁田遺跡

前原町文化財調査報告書 第41集

発行 前原町教育委員会
福岡県糸島郡前原町大字前原623番地

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
山口県下関市長府扇町9番50号

